

才能の権化が才能を無駄遣いしていることを嘆くのは間違っている
だろうか

柔らかいもち

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「無駄に洗練された無駄のない無駄な技術ってさ、他人事だから笑ったり呆れたりして見られるんだ。それを身内がやっているのを見るとさ……なんていうかこう、やるせなさでいっぱいになる。どう表現すればいいんだろうな……世界一の腕を持つてるのにう○こしか描かない画家に出会った感じ？」

By ヘルメス

目次

才能の使い方	1
開いた店のお客さん	5
お店の準備	10
囚われた妖精姫	14
蹂躪	19
手紙	28
ジークに対する評価	35
豊饒の女主人	40
24階層への依頼	48
ジークの過去	53
壁上での訓練	59
18階層	66
神月祭	72
男の浪漫	79
黒幕の正体	83
『異端児』	89
Hero	97
番外編 アストレア・レコード	106

才能の使い方

何枚もの海図や陸路の地図が壁に張り出され、砂時計や旅行用の鞆と帽子などの物品が溢れかえって旅人の家を彷彿とさせる部屋は、「ヘルメス・ファミリア」の本拠、主神であるヘルメスの神室である。書類の束やチェスの駒で山脈が築かれた机で開けたワインをグラスに注ぎ、椅子に腰かけるヘルメスは一人呟く。

「彼が俺の眷属になってもう五年も経つのか……。まったく、神の俺がこんなことを言うなんて。時が経つのを早く感じるようになったのか、遅く感じるようになったのか、自分でもわからないな」

ヘルメスが思い浮かべているのは一人の青年である。

青年と出会ったのは彼が十三歳の時。都市外に住むとある好々爺に連絡を取った帰り道で『オラリオに行きたいんだけど金がないんだ。だからモンスター「ドロップアイテム」を売って資金を稼いだ。いんだけど、これっていくらで売れる?』と、半殺しにされたLv. 1でも最上位クラスのモンスターに腰かけて尋ねられた衝撃は今でも忘れられない。

彼の質問に答えるより先に『神の恩恵』の有無を聞き、ない、と返されたヘルメスは確信に胸を震わせた。この子には間違いなく才能が、資格が、強さがある。

『英雄』になるための全てを兼ね備えている、と。

そこから早かった。あの手この手で自身の派閥に勧誘し、いい返事をもらった瞬間に全速力でオラリオに戻り、すぐさま『恩恵』を授けた。

そこでもヘルメスは笑みを浮かべた。最初から発現していた『魔法』はどれも魅力的で、成長速度やLv. 1 まで何だっけと言いたくなるほどぶっ壊れた効果の『スキル』を見た時にはヤバすぎる顔になっていた。——具体的には長い間留守にした挙句、大量の仕事を押し付けていきやがった主神を折檻してやるために部屋に入った団長が、変態から美少年を守らねば、と全力でぶん殴ってしまうくらい。

神聖文字を解読できるアスフィも彼の「ステイタス」を見てヤバイ

顔になってしまったがそれはさておき。

眷属達と共にダンジョンに向かわせ、どんな様子だったかを尋ねてみれば、帰って来るのは彼が天才であることを証明する言葉の数々。

『恩恵』を授かったばかりなのか疑わしい速度だった。

モンスター動きや弱点を瞬時に見抜く目を持っている。

相手の動きに気持ち悪いくらい合わせ、誘導していた。

攻撃に無駄な力や行動が欠片もなく、極東の豆腐のように斬り捨てていた。

もう『並行詠唱』を使っていた。

ダンジョンに行く度に眷属達のプライドとか自信とかをベツキベキにする少年は、なんと半年で「ランクアップ」した。なんなら「ステイタス」はオールSになってた。これにはヘルメスも乾いた笑いを零すしかなかった。

そんな天才だった少年だが、「ファミリア」で爪弾きにされるということはなかった。彼は人と接するのが上手だった。

困っている人がいたら助ける。冗談や軽い悪だくみなら嬉々として乗って来る軽さがある。空気だつてちゃんと読む。『モテたい』と真顔で宣言する潔い欲がある。なにより主神の言うことを素直に聞いてくれる（ここ重要）。

だからヘルメスは少年を可愛がった。悪い遊びを教えたし、なんなら連れて行った。女神だけが入れる浴場に覗きに行き、彼だけ成功していた（ヘルメスはギタギタにされた）。子供にはまだ早い神々の概念——『ヤンデレ』『ツンデレ』『クーデレ』といった女の子関連のもの語り尽くした。

そんな日常的一幕がありながら少年は青年へと成長していき、メキメキと強くなった。『神秘』や『精癒』のようなレアな発展アビリティも獲得した。

もう語る必要もない。ヘルメスが手に入れた眷属は『才禍の怪物』に匹敵する天才である。

「ふう……」

過去の思い出から戻ってきたヘルメスは小さなため息を吐くと、勢

いよくグラスをあおった。そして衝動のままに頭をかき回し、絶叫する。

「なのになんで『くっ殺の館』とかいう卑猥な店をオープンするところまで行っちゃったんだ!？」

いや、わかってる。原因はわかってる。でも認めたくないと心の中のヘルメス・ソウルが叫んでいる。

ヘルメスは会わせちゃったのだ。L.V. 5になった時、『英雄候補』のお披露目のために神随一のエロ爺と会わせてしまったのだ。そこでまあ、ゼウスは面白おかしく余計な情報^もからいらぬ情報^もまで吹き込みまくった。青年の欲望をデンプシーロールの如く刺激しまくった。

その結果、青年の中には『凛々しい見た目をした綺麗な女の子達はお前さんみたいなイケメンに「くっ……殺せ!」と言いつつ力尽くで気持ちよくされることを望んどるんじゃない』という爺のセリフが魂に根付くレベルで残った。なんなら『スキル』まで発現した。影響受けすぎだろ、とヘルメスが思う暇もなく、青年は動いた。

オラリオの女性で最高位のL.V. 6が来ても『圧倒的な力で捻じ伏せるシチュエーション』のためにL.V. 7に。『耐異常』で媚薬やお香が効かないという事態を防ぐために『調合』アビリティを獲得し。優れた観察眼や器用な手先は女性の性感帯を刺激することに使われた(派閥の女性団員が実験台になった)。

ここままでふざけた理由でL.V. 7になった馬鹿がいるだろうか? こいつ、『ランクアップ』に苦労したことないんだぜ? しかもな、野郎やブサイクのアへ顔は見たくないとか言って選り好みしているくせに、『くっ殺の館』は大繁盛してるんだ。金は手に入るし気持ちいい

い思いもしている。

「見てるか、ザルド、アルファイア……それにエレボス。こんなのが『英雄』になっても俺は喜べる自信がないぜ」

天に還った神友達に言葉を零し、ヘルメスは酒に走った。

酒に走った理由？ ダンジョンそっちのけで女を食いまくっているはずの万死に値する男が「ランクアップ」できるようになったからですけどなにか？

開いた店のお客さん

ジーク・グレイマンは幼少の頃から自身が天才であると疑っていた。第三者の視点から見れば天才であるということ自体は間違っていないが、本当に天才なのか疑いたくなる部分があった。

まあ、何が言いたいのかというと、ジークは天才であるが同時にそれを帳消しにするくらいスケベだった。

『いいかジーク？ 男はなー、金属の剣の腕と下半身の剣の腕を磨けば勝ち組になれる』

そもそも父親がこれである。二歳になったばかりの息子にとんでもないことを抜かし、ジークはそのセリフをすっかり記憶した。『私のことを弄んでたのね!』『騙したなあ!』『裏切り者っ!』と罵詈雑言と共に刺されまくっていたこともよく覚えてる。

三歳の時、父親がべらぼうに強い『黒竜』とかいうモンスターに殺されたと聞いて思ったのは、

(遂に刺されて死んだか？ それとも腹上死？ あるいはおつかねえ女の尻に敷かれて帰れなくなったとか？ だって女にだらしがないクソ野郎だったし。人妻に何回も手を出して修羅場になりまくってたし。数え切れないほど殺されかけたり死にかけたりしてもゴキブリみたいなしぶとさで生きてたし)

真っ先に考えるのが女性トラブル。悲しみや寂しさは正直言ってみて感じなかった。親をなくした三歳児の思考じゃない。

と、こんな感じで生きてきたが、不幸な幼少期を過ごすことはなかった。天才の所以を存分に発揮し、衣食住に一切困ることなく生活していた。

問題なのは大きくなるにつれてスケベの側面が仕事を始めてしまったことだ。

幼少の頃に吹き込まれた『手に持つ剣と下半身の剣を鍛えたら勝ち組』というセリフのしぶとさは凄まじく、少年の中にしっかりと根を張り、『モテたい』『エッチなことしたい』『ハーレム作る』といった欲望を実らせ、立派なスケベ小僧に成長させてしまった。

大人になったジークは誇り高い相手を屈服させるのが好きになっていた。彼の中にあつた強い相手ほど乗り越えたくなる冒険者の性が歪んでしまった結果でもある。性根が腐ったともいう。

しかも面倒な歪み方をしていた。まず対象は女性限定。そして清く正しく美しい相手ほど興奮するのである。酒場のエルフや治療院の聖女など超好みである。男性やクスだったら痛めつけたり屈服させるのに微塵も抵抗がないどころか、積極的に踏み躪りに行く。しかし、穢れを知らない女性だと快樂で墮とす時の背徳感がたまらないらしい。クソ野郎である。

誰もジークのスケベ心の肥大化を阻止することはできず、それどころかエロ爺による『くっ殺最高』の後押しまでされたせいで、彼は欲望丸出しの妄想を圧倒的な才能で実現させてしまった。

その結果が『くっ殺の館（命名：とある爺）』である。

館の設備にはとても力が入っている。能力ステイタス・ダウン下降と魔法封じの素材で作成した手枷足枷、部屋は年季の入った石材で作成、見せつけるための拷問器具と身体に優しい素材で作られた大人の玩具。監督は田舎で隠居している神がした。費用は一億ヴァリスを超えた。

集客は有り余る才能を無駄遣いしまくって行った。つまり優れた感覚センスや圧倒的な「ステイタス」によるごり押し戦術だ。

都市中を隅から隅まで駆けずり回り、目に留まった女性を調査。神に近い直感と偏見で客になるかどうかを判断し、偶然耳にしてしまう塩梅の音声で店の情報を流す。

客が来たらどのような趣旨の店なのかを理解していることの確認を取り、客だったらサービスを受けてもらう。そこで満足してもらってからが本番だった。

お店で金払って「くっ、殺せ」？ そんなものはくっ殺とは言わない。娼館にでも行って金を積んで頼めばいい。理不尽に誘拐され、抵抗できないと思い知った気高い女性が獣欲の餌食になるくらいならと口にするのがくっ殺なのだ。それを再現できないでなにか『くっ殺の館』か！

なのでジークは頑張った。

またの利用を望んだ女性に『神秘』と『魔導』のレアアビリティを使って作成した複製不可能な魔道具マジックアイテムの装飾品アクセサリを渡した。この魔道具マジックアイテム、屈服させられたいという感情に反応して変色し、変わる色によつて欲求の深さがわかる性質をしている。

——特定の感情に反応する魔道具マジックアイテムなんて世界中を見渡してもあるかもわからず、オラリオを代表する稀代の魔道具アイテムメーカーメイカーは、『こんなもの作るくらいなら嘘に反応する道具でも作って下さいよお……！』と涙目になった。その後、メンゴメンゴの軽い謝罪と一緒に『賢者の石』を渡され部屋に引きこもった。『賢者の石』は渡して二秒で粉々にされた——。

魔道具の目的は目印だ。装着して色が変化していれば店の利用を望んでいるとわかるので、唐突な拉致監禁の演出をしても問題ないのだ。そしてどの程度変色したかでサービスをする。これがお金を払って行われている、などという余計な考えはジークの『催眠魔法』で消し去るので完璧だ。

そしてこの店を曖昧な表現で誰かに教えるのはいいが、具体的な内容を伝えるのは禁じている。店のサービスと誤解して無抵抗に強姦されることを防ぐためだ。こちらはジークの『制約魔法』のおかげで破られることはないし、悪用しようとした連中は片っ端から始末している。

使った金は到底回収できない額になっているものの、ここまで頑張ったおかげで経過は順調だ。店に来た客には一個しか魔道具マジックアイテムを渡してないのに類は友を呼ぶとも言えいいのか、客の数はどんどん増えている。こんなに破滅願望を持っている女がいるのかよ、とドン引きした。

一つ問題があるとすれば……子供が出来ちゃうかもしれない過激コースだけは『催眠魔法』で済ませていることだろう。『催眠魔法』の使い方間違ってるだろ』『こんなことに利用してる時点で間違っています』と主神と団長に突っ込まれた。ジークはいざ本番になるとびびって何もできないヘタレ童貞だった。だからいっぱい『魔法』が使

えるのかもしれない。



(さーて、今日はどんな人が来てるかな?)

時刻は夜。ジークは日の光が消えて暗闇に包まれた『ダイダロス通り』を走っていた。連れ去られるならここでしょ! というイメージから客には指定した時刻に『ダイダロス通り』にいるように言っているからだ。

(この前は何故かヒキガエルの化物がいたからな……何も考えずに叩き潰したけど。くっそう、客自身の判断に任せてあるから好みじゃない女も来たりするのがこのシステムの欠点だよな——!?)

と、客に指定した場所を前にしてジークは足を止めた。そこにいたのが信じられない人物達だったからだ。

(な、な、な……【九魔姫^{ナインヘル}】リヴェリア・リヨス・アールヴに【純潔の園^{エレルリーフ}】アリシア・フォレストライト、【千の妖精^{サウザンド・エルフ}】レフィーヤ・ウイリディスだそう!? 何故ここに!?)

男ならむしやぶりつきたくなる麗しいエルフ達。しかし、彼女等は【ロキ・ファミア】。客かどうか判断するための装飾品^{アクセサリ}を身につけているようだが、その険しい顔を見れば目的なんてわかりきってる。

(くそおー、遂にバレたか! ギルドはウラノス様からの依頼で、【ガネーシャ・ファミア】は生け捕りにして猿轡で『魅了』を封じた『マーメイド』を譲って黙認してもらったのに、ちくせう! もう俺の楽園は終わり……ん?)

一人静かに絶望していたジークはふと三人の女エルフ達を見た。

護身用の杖や剣、防具をしつかり装備している。腕にあるのはジークお手製の装飾品^{アクセサリ}……色は、大分変わっている。

「……………」

マジックアイテム

魔道具の故障と正常動作が脳内天秤に乗り、一瞬で後者に傾く。スツと消えるジークの表情。ぎちつと音を立てる黒手袋。

「――」

一瞬でリヴェリア達の背後に回り、首を叩いて意識を奪う。気を失って倒れるエルフ達を抱え上げ、全力で店に向かった。

(超絶美人のハイエルフキターアー!! しかもあの【九魔姫】^{ナイン・ヘル}! 絶対にリピーターにしてやるぜえええええええ!!!)

彼は欲望に正直だった。

お店の準備

『——死んでしまいたい』

リヴェリア、アリシア、レファイーヤの三名がそれ——ジークの魔道具マジックアイテムを手に入れたのは偶然と成り行きである。

リヴェリアに魔導士として師弟関係にあるレファイーヤが少しでも恩を返そうと、都市西南の第六区画の複雑な隘路に建つ『ウィーシエ』というエルフが好む造りをした喫茶店に誘い、その場に居合わせたアリシアも両者から誘われ同行した。

眼鏡をかけたエルフの主人に案内された瀟洒なテーブルを囲い、それぞれが飲み物や軽食を頼んで話に花を咲かし始めた頃。その物騒な言葉は聞こえたのだ。

声に反応してレファイーヤ達が振り向いた先には、彼女達と同じ女性のエルフが三人いた。その内の一人がうわ言のように「死にたい……」と呟き、他の二人は賛同するように首を縦に振る。

「……お前達、何があった?」

他種族に比べて寿命が長いエルフの命を軽んじる発言に、リヴェリアは叱声を浴びせようと口を開いたが、影を落とした彼女達の顔を見て心配の声をかける。

「リヴェリア様!? も、申し訳ございません、耳を汚す言葉など聞かせてしまって……我々はこので失礼いたします!」

「待て。詫びる気持ちがあるのなら、何故そんなことを口にするようになったのか教えてくれないか?」

畏敬の対象である王族ハイエルフにそう言われてしまえば、店を出ようとしていたエルフ達は引き返す他ない。レファイーヤ達がいるテーブルの椅子に座つても口を小さく開閉していたが、リヴェリアの視線に観念したように口を開いた。

しかし……、

「制約ギアス、だど?」

「はい。だから我々は何があったのかをお話しできません。何処で誰がやったのかもお伝えできません。一つ言えるのは、一度でも『奴』に

襲われればほぼ逃げられません。奴が生きている限り、この胸の奥で燻るものと向き合わされ続けます……。リヴェリア様を尊敬するからこそ、関わってほしくはありません」

ただ、と前置きをして彼女達は水晶がはめ込まれた腕輪を机に置いた。これは？ とアリシアが尋ねる。

「奴が獲物に付ける目印です。これを装備した際に状態が変化し、装備した者だけで特定の場所に行けば奴は必ず現れます。その場所だけは私からもお伝えできますが……。如何なされますか？」

暗い同族の顔を見て黙っていられるほど「ロキ・ファミリア」のエルフの誇りは腐っていない。それぞれが悩む素振りもなく腕輪を付けると、全員の腕輪の水晶が光った。

ありえないものを見るかの如く目を見開いたエルフの口から告げられた場所は——『ダイダロス通り』だった。

「——昼に話した彼女達のLvは3。そして『万能者』^{ベルセウス}にこの魔道具^{マジックアイテム}を調べてもらったが、『神秘』と『魔導』の発展アビリティがなければ作成は不可能とのことだ。気を抜くなよ」

「つまり、最低でもLv. 4の『魔法』を使える誰かが相手ということですね」

「何者でも関係ありません。同胞にあのような表情をさせた罪を償わせてあげましょう！」

準備も警戒もしていたが、ノコノコと三人だけで『ダイダロス通り』に赴いてしまったエルフ達は、あっさりと攫われた。

ちなみに魔道具^{マジックアイテム}の鑑定を依頼された時、アスフィの目は色んな意味で死んだ。



ブイイイン……と無機質な音を立てながらピンクの水蒸気を吐き出す魔道具^{マジックアイテム}。吐き出される水蒸気は透明な管の中を通り、別の部屋に運ばれていく。超硬金属^{アダマンタイト}を石材で覆って造られたその部屋には意識のない三名のエルフが拘束されていた。

噴き出す水蒸気は媚薬を気化したもので、マジックアイテム魔道具を作ったのはもちろんジーク。『耐異常』対策に作成したお香は効果抜群でエロい雰囲気や自然と形成してくれるのだが、いかんせん拉致監禁のシチュエーションでやっているのと近所迷惑にならないように防音処理を施しているため、空気を通すための孔が小さい。なのですぐに煙たくなってしまうのだ。以前とある大国の貴族なのに騎士をやっている客が『くっ……ころぐほっ』とキメ台詞で咳き込んで二度と来なくなることがあるため、急いで作成に取り掛かった過去がある。媚薬には肌に潤いを与え喉の調子を整える成分が含まれており、『なんで媚薬にしたのですか……!?!』と聖女に怒られるほど効果が高い。『……』

開閉可能な覗き穴から部屋の様子を窺う。それなりに時間が経ったが、ピンクの煙が満ちるにはまだかかりそう。排気量を上げた方がいいだろう。マジックアイテム魔道具の調整をするためのダイヤルを摘んだその時、

「兄ちゃん、遊びに来たよ!」

『ダイダロス通り』特有のイレギュラー異常事態発生! 偶に親切にいただけでやたらと懐いた子供達が見つかりにくい場所にあるはずのこの店に何故かこんな時間にやって来た!

知り合いにこんな所を見られたら焦るだろう。ジークのような天才だって焦る。『こんな時間に来るな。非常識だろうが!』と怒鳴って『お兄ちゃんのやっつてることの方が非常識だと思う』と聡いハイフェル半妖精の子供に論破され、『俺はブタの燻製をしているだけだ!』と無理矢理捻り出した言い訳を『ブタの前にメスって付くんでしょ? この前アマゾネスのお姉さんが言ってたよ』と無垢なシアンスロープ犬人の女の子に斬り伏せられ、狼狽えたりだつてする。

しかーし! 伊達にLv. 7をやっていないジークは言葉での勝負を一瞬で諦め、『催眠魔法』という最強の切り札を切ることを決意する。大人気ないと言うことなかれ。『大きくなったらお兄ちゃんと同じことしたい!』と言った子供達の夢と笑顔と性癖を守るためなのだ。

防音処理のせいで重たい扉が開くまでの間に、ジークは短文詠唱を恐ろしい速度で唱える。そして扉が開いた瞬間、ダイヤルから弾かれたように離れた手から光が放たれ、子供達を包み込む。何が起こったのかわからないまま夢の世界に旅立った子供達を丁寧に抱え上げ、彼等の住処である孤児院に連れていく。

「ふう……やれやれだぜ。子供の思考回路はダンジョンより読めないな」

急いで店に戻ったジークは魔道具マジックアイテムに近付く。急がなければエルフ達が目を覚ましてしまう。『くつ殺の館』の仕事人の誇りにかけて、ムードを微塵も作れない水蒸気を見せる訳にはいかな……ん？ なんで魔道具マジックアイテムがブオンブオンツと唸りを上げてんの？ あ、さつき『魔法』を使った時に手が当たってダイヤルが最大まで回って……やっべ。

仕事部屋を覗き込む。ピンクしか見えなかった。慌てて空気を入れ替えて中にいた三人を見ると、全員が大惨事になっていた。特に『千の妖精』は女の子がしちやいけな顔をしていた。一番若いから性欲も大きいのもかもしれない。

まだ意識が戻ってなくてよかった、パンツだけはバレそうだし履き替えさせておこう、服は汗と勘違いしてくれるといいなあ……と祈りながらジークはタオル片手に証拠隠滅を始めた。

果てしなく自業自得だった。

囚われた妖精姫

ぴちよん、と天井から滴り落ちた水滴が弾ける。落ちた雫と窪みにできた水溜まりがぶつかり合い、発生した静かな音がとある妖精の耳朶を震わせた。

「……………っ？　（こ）は……………」

瞼が緩慢な動きで開き、露になったリヴェリアの翡翠色の瞳に淡い光が入る。少しだけ目を細めて光に慣らした彼女は辺りを見渡した。

どうやらここは床も壁も天井も剥き出しの石材で造られた部屋らしく、壁に取り付けられた小さな魔石灯では照らしきれない暗闇が四方に続いているほど広い。部屋のあちこちに何かが置かれていたが、リヴェリアの目は一ヶ所で止まった。

「アリシア、レフイーヤ！」

ここに運び込まれる前に共にいた仲間の姿をはつきりと見られたのは、彼女達の傍にカンテラ型の魔石灯が置かれていたから。仲間の無事を確認したりヴェリアだが、生じかけた安堵はあつさりと潰れた。

アリシアは壁に寄りかかりながら石床に座り込んでおり、両手を鎖によつて頭の上で何重にも拘束されていた。しかし、それ以上に不味いのがレフイーヤだ。

彼女は寝台ベッドの上にいた。寝台の角から伸びる手枷と足枷が嵌められ、大の字になって寝かされている。そしてレフイーヤの近くの魔石灯に照らされる盤棋チェスの駒に似た小瓶に詰まっている赤い液体は——精力剤だ。娼婦に騙されていた団員の一人が使えもしないのに買い込んでいた物を見たことがある。

想い浮かぶのは死を願う言葉を口にしていたエルフ達。警鐘が貞操の危機を伝え、女性にとつて悪夢に等しい光景を脳裏に映し出す。もしこんな未来が実現してしまえば、エルフの中でも潔癖なアリシアは二度と立ち直れなくなるだろう。まだ若いレフイーヤだって心を砕かれるかもしれない。リヴェリア自身も耐えられる自信がない。

危機感に突き動かされたリヴェリアがレフイーヤ達に近付こうと

した瞬間、ガシヤツ、という音が響いた。ここでようやくリヴェエリアは自分の体勢に気付いた。

彼女もレフィーヤ同様、四肢を枷で拘束されていた。異なるのは天井から伸びる鎖が短く、嫌でも立った姿勢を強制されるどころだけ。Lv. 6の「ステイタス」を發揮して破壊を試みるも、鎖はギチギチとなるだけで千切れない。魔導士とはいえLv. 6の「力」でだ。

ステイタス・ダウン（能力下降と魔法封じの『呪詛』の鎖!? 不味い、『奴』とやらを甘く見過ぎた。下手な第一級武装よりも高価な鎖とLv. 6を奇襲できる時点でLv. 6以上は確定。このままでは……!）

何度も鎖を引っ張り、その度に耳障りな金属が擦れ合う音が響く。やけに室温が高いのか、それとも焦燥が膨れ続けているせいか、噴き出る汗で服がぐっしよりと濡れて不快になる。それに何故かダンジョンに潜った後とは異なる未知の倦怠感がのしかかっており、リヴェエリアの抵抗する力を奪っている。

「くっ……外れないっ!」

ついに苦渋の声を漏らし、手足に込めていた力を緩めて息を吐いた時だった。

「おやおや……もう目が覚めたのか。流星は「ロキ・ファミリア」の第一級冒険者、リヴェエリア・リヨス・アールヴ」

「!」

唐突に闇から生まれ落ちたかのように、リヴェエリアの眼前に男が立っていた。

身長はリヴェエリアより高く、一八〇Cセルチはあるだろう。頭髪は黒と白のメツシユが入った灰色。白いシャツに黒のコート、黒いズボンと黒手袋を身に纏い、顔は目元だけをマスクで隠している。

「……貴様は何者だ?」

リヴェエリアの口から零れたのは男の正体を問う純粹な疑問。

彼女は魔導士だが歴戦の冒険者だ。武芸を嗜む者特有の癖や立ち振る舞いを見抜く目を持っている。リヴェエリアを抵抗なく攫えるほどの強さを持つ者など世界規模でも数えるほどしかいないため、即座に犯人を特定できると考えていた。

しかし、わからない。リヴェリアは目の前の男の正体を見抜けない。都市最強の「ロキ・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」の誰も一致せず、彼等以上の技量を感じさせる化物なんか欠片も覚えがない！

「何者か？ お前達を攫った者だ。それ以上でも以下でもない」

「……っ！ なら何が目的でこんな真似をした？ 私達が「ロキ・ファミリア」だと知った上でこの所業、命が惜しくないのか」

正体が探れないなら目的を。可能性は低いが「ロキ・ファミリア」の名声に怯えて退くことを願って派閥の名前も出す。

すると、唯一見えていた男の唇が釣り上がった。

「目的？ お前達みたいなのエルフを凌辱するだけだが？」

リヴェリアの頭が熱くなる。殺気が籠った目で睨みつけるが、男は飄々とした態度を崩さない。囚われた妖精を嘲笑うように足音を立てて歩き始める。

「俺はお前達のようなエルフが好きだ。美しい上に気高く、悪逆非道を許さない。俺の噂を耳にすれば光に誘われる虫のようにやってくる間抜けなところが好きだ」

「自分の貞操と仲間の尊厳。どちらも破滅への選択だ。そして……大いに迷い、大いに悲しみ、大いに嘆きながら選んだそれに意味がないと思いついた時の顔と声は最高だ！ 一生飽きることはないだろう」

「日の当たる世界に戻っても救われることはない。それどころかその身に付いた穢れが一層際立つだけだ。後はもう堕ちるだけ……全身を底なしの沼に沈めて綺麗なところを塗りつぶし、全てを真っ黒に染め上げて、完全に諦めるために何度も俺の下へ来るようになる」

ゆっくりと語りながらリヴェリアの周りを歩いた男は彼女の前で止まる。そして、告げる。幾人もの女の尊厳を砕いてきた悪魔の宣告を。

「千の妖精」^{サウザンド}達から犯すなんて言えば、お前は必ず自分からやれと言うだろう。でもそんなのはつまらない……だからゲームをしよう」

「ゲームだど？」

「そうだ、ゲームだ。今から一時間、俺はお前を性的に嬲る。耐えられ

たら全員解放するし、どんな要求にも従おう。だが、一度でも絶頂すれば——あちらで寝ている【千の妖精】と【純潔の園】を犯す」
「なっ!？」

「おまけで排卵誘発剤も使ってやろうじゃないか。俺みたいなイケメンの子供を妊娠できるんだ……感涙に咽び泣くといい」

「この……外道め!」

鎖を鳴らしながら睨みつけるが、男は余裕の笑みを崩さない。それが途方もなく悔しかった。

「俺を外道と呼ぶか。なら第二の条件だ。絶頂した後でも俺はお前を苛めるが、時間内に意識を失わなければ犯すのはお前だけにしてやる。どうだ、お前の失態は頑張り次第で取り消せるようにしてやっただ。優しいだろう? ……あつ、自分だけは助かるために奴等を見捨てるのも選択肢に含まれているぞ。好きに選べ」

——『悪』だ。目の前の男は『悪』だ。どす黒い『悪』だ。

自分のために部下を切り捨てるなんてリヴェリアにはできない。ゲームに乗ればほぼ間違いなくレフィーヤ達は犯されることになる。敢えて希望を見せているのもより絶望させるためだろう。

「選べよ。自分が清い身でいるために部下を見捨てるか、誇りに拘り道連れにするか。選ばないなら全員の貞操を奪ってやろう。ほら、選べよ。とつとと選べ。仲間を見捨てるのか、誇り高いエルフの王族が?」

「ふぎ、けるな……ふぎけるなっ!! お前は人を、女をつ、何だと思っ
ている!？」

「そんな常套句は聞き飽きた。だから、そら——選べよお」

女の感情が汚されたくないと言っている。エルフの矜持が仲間を助けると怒鳴っている。自分自身の魂は選びたくないと言っている。

だが、男は時間を与えようとしなかった。「そうか」と呟くと踵を返し、レフィーヤ達の方へ歩を進める。

「なら特等席で眺めているといい。自分可愛さに見捨てた女どもが犯されるところを——」

「——待て」

「なんだ？」

「……ゲームをやる。結果が出るまで、二人に手を出すな」

「……ははははっ！ これは傑作だ。自慰行為もしたことがなさそうな王族ハイエルフが弄んでほしいとお願いするとは。どうせ澄ました顔してピンク色の妄想はしてたんだろう？ このド淫乱め」

わかりやすい挑発には乗らない。反応しても相手を喜ばせるだけだ。ならば道は一つ。悪魔が見せびらかす偽りの希望を本物にすること。

決意を瞳に宿し、嗜虐的な笑みを浮かべる男の視線と真つ向からぶつかり合う。男の手が伸ばされ、リヴェリアは強く歯を噛み締める。ゲームが始まった。

——四〇秒後。『耐異常』を貫通するほど効果の高い媚薬付けにされ、性的な快感に慣れていないリヴェリアが絶頂するのは余りにも早かった。

そこから五分が経過し、体力は底をついた。次は【純潔エルリフの園】の番だな、という言葉も理解できないほど衰弱したリヴェリアは運がよかった。万が一、男が提示した時間を耐えきつていれば「じゃあ俺はチャンスを設けてあげたし、もう一時間追加ね！」と告げられ、心を押し折られていたから。

そして。

ドゴンツ!! という轟音が響く。振り返った男の前に転がるのは足の形に歪んだ扉。間を置かずにくつもの魔石灯の眩い光が暗闇を切り裂いた。

瞼が落ちていく。狭まっていくぼやけた視界が捉えたのは小さな黄金色の影。

(……………フィン)

助けに来てくれた仲間の名前を胸中で呟くのを最後に、リヴェリアの意識は途絶えた。

蹂躪

扉を普段の彼らしからぬ豪快な蹴りで破ったフィンが指示を出すより早く、男が動揺から立ち直り人質にするためかりヴェリアに手を伸ばすより速く、彼女——アイズは動いていた。リヴェリアとの距離を一瞬で喰い尽くし、腰から引き抜いた銀の剣《テスペレート》を男に向けて流れるように振るった。

「ちいっ！」

舌を弾いて躲した男はならば他の二人を、とレファイヤとアリシアのいる方へ顔を向けるが、二人の傍には大双刃ウルガと湾短刀ククリナイフを携えた双子のアマゾネスが立っていた。どちらも近付けば殺すと言わんばかりの殺気を放っている。

部屋唯一の出入り口は言うまでもない。小人族バルウムの勇者を始めとしたドワーフと狼ウエアウルフ人の第一級冒険者、魔石灯と武器を構える第二級冒険者達によって塞がれている。

あつという間に人質を奪われ逃げ道も失った男が口を開く。

「どうやってここに辿り着いた？ 俺の装飾品アクセサリを付けた獲物は制約ギアスで第三者がここを知りかねない言動を一切取れなくなる。攫う時も痕跡は残さなかった」

「無駄を嫌うリヴェリアが趣味の悪い魔道具マジックアイテムを付けて、何も言わず夜遅くに若い女性団員を連れてどこかに行こうとしていた時点で怪しいと思っていた。後は僕の勘と獣人の嗅覚で『ダイダロス通り』へ向かったと大まかな当を付け、人海戦術で見つけ出した」

「……マジかよ、クソ。【勇者】ブレイバーの知恵と勘はヤバいって聞いてたけどここまでかよ。おねシヨタとシヨタおねが似合う小人族程度バルウムにしか見てなかったのに……」

大好きな団長への侮辱にぴきつつ、と【ロキ・ファミリア】の大多数から青筋が走る音が響く。特にティオネは隣のティオナが状況そっちのけでドン引きしてしまうほど怒りで顔を歪めていた。

部屋に入った時に確認した血痕らしき赤が付着した拷問器具、すぐに目を逸らしたが女性にとって最悪の辱めを受けたりヴェリアの姿

にフィンの忍耐も限界であり、今の一言で一線を越えた。

すつと腰を落として槍を構える。軽口を叩いていた男もついに顔色を変え、フィンを宥めるかのように両手を前に突き出す。

「落ち着けよ【勇者】^{ブレイバー}」。せっかちな男は嫌われるぞ。もしかして小人族^{バルウム}の見た目通り器も小さいのか？」

「ああ、僕は器が小さいんだ。君を死ぬ寸前まで痛めつけたいから投降なんてさせる気はないし、なんなら四肢を破壊して団員達の中に放り込んでやろうとも思ってる」

「ちよつとした冗談だろ。待って。お前は同族の異性を探しているんだらう？ 紹介してやるから武器を降ろせよ。そうだ、【凶狼】^{ヴァナルガンド}と【重傑】^{エルガラム}、こいつを止めろ！ そしたら【九魔姫】^{ナイン・ヘル}で楽しませてやるぞ！」

フィンを止めるのは不可能と悟ったのかベートとガレスに取引を持ち掛ける。

「ハッ、行き遅れの年増ババアなんざ御免だ。とつとくたばれ」

仲間であるはずの団員達^{エルフ}から強烈な殺気をぶつけられながら、ベートは鼻で男を嗤う。

「残念じゃがエルフの細い身体に興味はない。大人しくフィンに負けろ」

ガレスは大戦斧を肩に担ぎ直し、拒絶の意を叩き付ける。

「枯れたジジイにホモの狼が！ 誰か俺を助けようと思う奴はいないのか！ 俺に付けばいくらでも女を楽しめるぞ！」

「死ぬ」

「死んで」

「死んでください」

「そんな誘いに乗る馬鹿は【ロキ・ファミリア】にいないわ。もしいたら殺す」

殺気を増幅させる女性団員と彼女達に怯えて縮こまる男性団員。派閥内での力関係が手に取るようにわかるが、何の意味もない。

「もう遺言は十分だろう？ 終わりだ」

「くつ、クソツタレがああああああああ!?」

地を這う獣の如くフィンが駆ける。突き出されていた手が腹を庇う位置に来たが関係ない。まとめて貫いてやる、と金の槍《フォルティア・スピア》を繰り出した。

「——なんちゃって」

ガキンツ!! という音を立てて黄金の穂先が掌で受け止められる。男はすぐに手を閉じて槍を掴み、引つ張る。碌な抵抗もできずに前のめりになるフィンの顔を鷲掴み、力任せに床へ叩き付けた。

どんな時も「ファミリア」を鼓舞してきた「勇者」は、そのままピクリとも動かなくなった。

「——え?」

その場にいた全員の時が止まる。第二級以下の冒険者は何が起きてフィンが床に押さえつけられているのかわからないという困惑で。第一級冒険者は再び軽薄な笑みを浮かべた男の想定を遥かに超えた強さに対する戦慄で。

男の纏う空気が変わる。追い詰められていた小物から、憐れな獲物を狩る無慈悲で絶対的な狩人へ。

アイズ達は実力差を理解しながらも挑みかかろうとするが、フィンに槍を突き付けられて動けなくなる。

「飛んで火にいるなんとやら、っていう極東の諺があったよな。この状況にピツタリだ。女好きの神のお眼鏡にかなった綺麗な女が沢山いる。——楽しみだなあ、お前達を本能に忠実な雌にしてやるのが」
悲鳴を上げて女性団員が震える。瞳が恐怖に染め上げられる。今の攻防で男の言葉が不可能ではないと悟り、自分達の末路がリヴェリアと同じだと理解する。女の戦意はあっけなく砕かれた。

「ここは俺の楽園で、聖域で、理想郷だ。侵入者は例外なく拷問して苦

しめて排除しているが……今日の俺は気分がいい。女を置いていけば見逃そう。そして母性皆無な女神おやに泣き付け。クソイケメンお兄さんに苛められて逃げ出しましたっつてな」

男性団員は憤ることもなく青ざめる。部屋で存在を主張する拷問器具が不安を助長する。使われた未来を想像した者は身体の端から力が抜けていくのを感じた。男の意地は全てを諦めたように沈黙した。

男は動けない「ロキ・ファミリア」に満足したのか一つ頷き、呻き声を出すこともできずに気絶したフィンを見下ろす。そして嗜虐的に唇を吊り上げると、口に槍を捻じ込んだ。

「テメエツツ!!」

「動けばこいつを殺すぞ」ヨルムガン【怒蛇】。それとも好きな男の前で犯されるのがお好みか?」

愛する人へのふざけた真似にティオネの怒りが頂点に達する。【怒蛇へび】の名に相応しい形相を浮かべて襲い掛かろうとするが、言葉一つで止められる。それでも湧き上がる怒りを隠すつもりは毛頭ないのか、強く歯が噛み締められた口と握りしめられた手からは血が滲み出していた。

ティオネに向けていた顔を戻し、男はフィンの口の中の槍を動かす。

「どうだ【勇者フレイバー】? 自分の得物ブツを舐めさせられる気分は? どうせ股間の槍は小さいから手に握る槍は大きくしたんだろ? んん?」

困るだろ、身の丈に余るところか物理的に身長は倍はあるブツとか。抱かれた女死ぬぞ。街中で勃起したらどうするんだ? まさか、ズボン破いてブラブラ揺れるソーセージを見られても気にしないというのか? お前に惚れるのは余程の馬鹿だろうなあ——」

「さつきから、ごちやごちや、ぐちやぐちや、あることないこと並べて、団長を馬鹿にしやがって……」

ティオネの口から小さな声が漏れる。不味いと思ったティオネが落ち着くよう呼びかけるが、妹の制止も自分自身の理性も受け付けなほほど、ティオネの怒りは膨れ上がっていた。

「——ぶっ殺す!!!」

いかなるモンスターも『咆哮』にも勝る怒声を上げ、石床を粉碎し、突き抜けた憤怒で発動した「大反攻」によって紅く染まった息を吐きながら襲い掛かった。

男はテイオネを見る。

「ふむ。抗うことを選んだか。俺も強気な女を捻じ伏せる方が好きだから大歓迎だ」

そして告げる。

「だから——『蹂躪』してやる」

そこからは宣言通りの蹂躪、いや、それ以上に『瞬殺』であった。

テイオネは槍で薙ぎ払われた。

テイオナは壁に叩き付けられた。

ガレスは殴って沈められた。

ベートは蹴り潰された。

それ以外は攻撃されたことに気付かぬまま意識を飛ばした。

知覚を振り切って行われる攻撃。アイズが終わったと気付いた時には、仲間が全員倒れていた。

「お前で最後だ、【剣姫】」

「!」

アイズの前に男が現れる。剣を振ろうとして《デスペレート》が自身の手になく、男の手中に収まっていることに初めて気が付いた。『魔法』を使おうと後ろに下がるが、男の手が少女の首を絞め上げ、そのまま華奢な身体を持ち上げた。

両手で男の手を解こうとするが叶わない。じたばたともがいても男の手が緩む気配はなく、逆にアイズの気配が薄れ始めた。

「怖がることはない。お前達は全員が俺に腰を振るようになる。苦しみも悲しみも苦痛も、復讐心さえも忘れて、俺から与えられる快感だけを求めて生きていく女に生まれ変わるんだ」

嫌だ! 心の中でアイズは叫んだ。『悲願』を忘れることは、彼女の人生を全て否定することと同じだ。それだけは絶対に認められない。

しかし、少女の意思に反して現実是非情だった。力を失った手足は

だらりと垂れ下がり、目から光はほとんど消えていた。金の少女の臉が降ろされようとした、直前。

「——ちよくつと待ったー!!」

軽薄な声が響いた。首から手が離され、アイズの身体が床に転がる。ごほごほと咳き込んで息を整えていると、

「ギリギリセーフかな？ セーフだよね？ 全員倒してるけど性的なことをしてないならセーフだと言ってくれえ!! ——あ、リヴェリアちゃんがあられもない姿になってる完全にアウトですはい」

錯乱していたかと思えば全てを諦めたかのような声音になった。

「……？ どういうことヘルメス様？ ……営業妨害で叩きだされたいの？」

「そんな訳ないだろ天才なんだから気付けこのアンポンタンツツ!!

リヴェリアちゃん達はこの店、というかお前を調べてたんだよ！ そんでもってお前が攫っちゃったからこんな大事になってるんだYO!!!」

「……でも魔道具は反応してたぞ？ 故障もしてなかった」

「そうだとっても性格とかでわかるだろ!! とうるか相手を選べよこのアホ天才!!」

営業妨害？ アンポンタン？ アイズが頭に大量の『？』を飛ばしている、男は震える手でマスクを外し、呟いた。

「……？だと言つてよ、バーニイ」

◆◆

「なるほどなあ。そんなことがあったんか」

【ロキ・ファミリア】本拠、『黄昏の館』。フィンの私室兼執務室でロキは机に腰かけて笑顔で頷いていた。

床に正座しているヘルメスを全く笑ってない目で見下ろし、頷いていた。

「——つて納得できるかボケエエエエエ!!」

ですよねー、と怒髪天を衝くロキを見てヘルメスはさめざめと泣い

た。その隣には「フブウ……」と呻き声を上げる肉塊が転がっていた。肉塊の正体はジークである。叩きのめした「ロキ・ファミリア」の面々を治療し——レフィーヤとアリシアは「ディアンケヒト・ファミリア」に預けた——目覚めた彼等彼女等に告げたのだ。煮るなり焼くなり好きにしろ、と。とても男前な宣言だと自負している。

そして本当に煮て焼かれて袋叩きにされた。フルボツコだ。男前な面は見る影もない。どうして生きてるのか不明なレベルのダメージである。

「まず何やねん『くっ殺の館』って！ 人類が思いつく店やないやろ！」

「いやー、元々ジークはこういうのが好きでね。『くっ殺』の概念を教えたらこうなった」

「自分が原因やないか！ リヴェリアの口から『くっ……殺せ』なんて初めて聞いたわ！ 興奮したけど！」

今回の騒動を説明するにあたって避けて通れないのがジーク特製の魔道具だ。マジックアイテムリヴェリアとロキに懇切丁寧に魔道具の説明をし、ロキが嘘じゃないと判断した途端にリヴェリアは崩れ落ち、泣きながら震える声で『くっ……殺せ』と呟いた。今は私室でアイズに慰められている。

「次！ フィン達が来た時点でおかしいと思うやろ！」

『助けに来た仲間があっけなく負けて、その仲間の前で凌辱される』シチュエーションが好きなきが割といたみたいだね……。その類だと思っただって」

「んな訳あるかい！」

ヘルメスを蹴り倒し、更にげしげしと踏みつける。ジークをやらなのは零能になっている神ではダメージを与えられないからだ。肩で息をするロキはボロボロになったヘルメスをこれだけは見逃せんと睨みつける。

「色々聞きたいことはあるが今日はこれで最後や。この子供のLvは？」

「レ……Lv. 7。【ランクアップ】もできるよ……これだけ、強く

なったのは………エッチなこと、したいから………だって………ガクッ」

「死んだふりすんな、起きろ！　ウチの子供達のメンタルどうしてくれんねん！」

ジークが性癖が捻じ曲がった童貞であることは「ロキ・ファミリア」に知れ渡っている。その結果、自信を無くす者が大勢出ているのだ。いくら強くても相手が『性欲に馬鹿正直な童貞』だと知ってしまったえば、シヨックの大きさは計り知れない。やるせなさも凄い。あのベートですら負けん気を出すこともなく部屋に引きこもった。

その後始末をどうするのかと優男の神を揺さぶるが起きない。死んだふりをしているのはわかりきっているので、本当に殺してやろうかという考えが脳裏を過ぎる。

「すみません。後日改めてお詫びに来るんで、今日は帰っていいですか？」

が、いつの間にか復活したジークがヘルメスを担ぎ上げていた。ロキは反射的に怒鳴りそうになったが、ジークが懐を漁り出したのを見てやめる。

「なんや？　金でウチの顔叩いて許してもらおう考えとるんなら本気で怒るで？」

「そんなつもりはないですよ。これどうぞ」
渡されたのはどう考えても懐に収まりきらない厚さの本——
魔導書グリモアだった。

は？　と首を傾げるロキ。ウン千万する貴重書をなんで懐に入れてるのかとか、今どうやって取り出したのかとかを考えていると、

「もう一冊どうぞ」

「えっ？」

二冊目の魔導書グリモアが重ねられる。ロキの腕に一億ヴァリス以上が乗っている。二重の意味で重い。

「おまけにもう一冊」

「ちよっ、まっ」

三冊目。ロキの膝と腕ががくがく震え出す。怒りとかが一時的に

吹っ飛んだ。

「あとこれ、『賢者の石』。好きに使ってください」

「……」

貴重品を渡され過ぎたロキの意識は途絶えた。



「あの数の魔導書^{グリモア}、どうやって手に入れたんだ？」

「自分で書いた」

「……『賢者の石』は？ アスファイに壊されただろ？」

「『持っているだけで賢者タイムになれる石』を略して『賢者の石』って呼んでるだけだぞ？」

手紙

勘違いと能力の高さが仇となって大惨事になった三日後。

「ふううー……なんとか許してもらえた」

改めて一人で「ロキ・ファミリア」に謝罪に行ったのだが、友好的な目を向けてくる者は一人としていなかった。エルフの団員は殺せだの店を潰せだの怒鳴って来るし、それ以外も非難の眼差しを浴びせてきた。

それでも命も店も無事だったのは話し合いをしたのが幹部陣とロキのみであり、ほぼ全員が圧倒的な利益を見せたら取引が可能だったからだろう。『俺は童貞だあ!!! あと子供できたら遊べなくなるし!』と「ロキ・ファミリア」に響き渡る大声で宣言し、それをロキが信じられない顔で肯定したのも大きい。

いかがわしいことをしていた、というのがジークの店を潰す大義名分だったのだ。前提が崩れ去って悔しそうにする幹部陣に勝ち誇っている、『ム力つくドヤ顔してんじやねーよクソ童貞!』とベートに言われた。かつちーん、ときた。

「うっせー! お前等だって生娘と童貞の集まりだろうがバーカ!」

この発言に対して「ロキ・ファミリア」は押し黙るしかなかった。ベートはそーいう経験がある。あるが、普段の彼の態度が問題だ。弱い女は嫌いだ興味ないだと言っているのに女性経験があると宣言してしまえば――

『ベートさん……下半身には正直なんですな……』

『硬派を気取ってるくせに、やることはやってるんだー。ダサーい』

『ベート・ローガ〜! レナちゃんはいつでも貴方の子供を作れるよ〜〜!!』

男性団員からは生暖かい目で見られ、アイズを中心とした女性団員からは白い目を向けられ、仲の悪いアマゾネス姉妹には思いつきり笑われる。そして最後のは何だ。欠片も身に覚えが無いのに異様に悪寒がした。

テイオネはフィンがいなければ見栄を張って（団長と）経験済みだ

と言えたかもだが、想い人がいる前では無理だ。万が一、他の男と寝たと勘違いされたら心中するしかなくなる。

フィンもベートと似たようなものだ。経験済みを選べばティオネが間違いなく殺しに来る上、本当に同族と寝たのかを疑われる。未経験だと言えば四十を超えても女を知らない魔法使いを超えた賢者だと馬鹿にされる。男のプライド的に嫌だった。

アイズトリヴェリアは当然未経験。ティオナは胸囲かわいさがないため論外。ガレスは空気を読んで黙っていた。結果、誰もジークに言い返せなくなった。

他にも先日提供した魔導書グリモア、『遠征』の手伝い、珍しいアイテムの融通を約束したことで許された。特に魔導書グリモアを渡したことが一番効果的だったのではないかとジークは思っている。

「なんとたつて俺が魂を込めて書いた官能小説だからな！」

魔導書グリモアは作成者の性格が反映される。『自伝・鏡よ鏡、世界で一番美しい魔法少女は私ツ　番外・めざせマジックマスター編』なんて地雷臭のするタイトルだったり、『ゴブリンでもわかる現代魔法』とかいう文言だったり、効果はあるけど内容が微妙になったりするのだ。

ジークの魔導書エロ本は凄。男でも女でも読み込まずにはいられないほど文章力が高く、使い終わった頃にはイッてしまう。それも快楽に蕩けた顔を晒して。人がいるところで使うと大惨事になること間違いなしの一品である。金持ちのドラ息子が美人な婚約者の前で読んで『魔法』を取得し、かつこいところを見せようとして破談になったという話もあるくらいだ。狙って売り込みに行っただけがあつた。

更に童貞が使うと低確率で魔法スロットを増やす効果もある。競売にかけたら笑えるほどの値段で落札された。――代わりに性欲が消滅して二度と戻らなくなるが。どこかの国の唯一の後継者から性欲がなくなつて滅びかけているらしい。ジークには『これで永遠の魔法使いじゃん。よかつたね！　キャハ☆』としか言えない。

そういった効果を一切説明せずに『黄昏の館』を後にしたジークが向かっているのは「ヘルメス・ファミリア」本拠ホーム、『旅人の宿』だ。示

談と言っているのかは不明だが、「ロキ・ファミリア」を叩き潰す必要はなくなつたとヘルメスに報告するためである。しかし――

「止まりなさい」

のんびりと鼻歌を歌いながら歩くジークに後ろから声がかけられる。振り向いた先には色素が抜け落ちたような灰の髪をした美少女が立っていた。ジークの中でヘルメスへの報告の優先順位が地の底に落ちた。

「これを」

「え？」

「さる方達から、貴方宛てです。必ず拝読しなさい」

どうやって自分の店に連れ込もうかと考えている内に女は手紙を押し付けて去っていった。ちなみに彼女――ヘルンがジークに向けての眼差しは汚物を見るようだった。

俺のイケメンフェイスに微塵も表情を変えないだと……!? などと謎に慄きながら手元にある二通の手紙に視線を落とす。一通はハートマークが付いている以外飾り気のないこぢんまりとした手紙。もう一通は極東の筆で書かれたと思われる『果たし状』の文字がある長方形の封筒。

「ラブレターに果たし状、だと……!?」

前者は神々によれば『校舎裏で待っていると書かれていて、そこには何故自分呼び出したのかもわからない美人な子がいるまでが^{テンプレ}お約束』らしい。しかもラブレターには偽物が紛れ込んでおり、ピュアな少年を嘲笑う悪質なものまであるとか。

後者は神々によると『夕日を背に河原で全力で殴り合い、最後は笑顔で拳を合わせて友情が芽生えるまでがお約束^{テンプレ}』という代物である。俺が全力で殴ったら大抵の奴は木っ端微塵になるんだけどな、などと考えながら『果たし状』の封を開く。ラブレターはお楽しみのため後にする。

……ふむふむ。なるほど。

(……指定された場所にこなければ【ファミリア】を消滅させるってあるんだけど)

これって脅迫状じゃないだろうか？　あまり綺麗ではない無骨な字で綴られた文を読み終わったジークはそう思った。

続いて小さな手紙を開けて読む。フムフム、フニヤリータ。

(……)　こっちも指定された場所にこなければ「ファミリア」を消滅させるってあるんだけど)

字は違うけど内容は一緒だ。指定された場所も一緒だ。もうラブレターの皮を被った劇物にしか見えない。無視したい。纏めて破り捨てて燃やしたい。というか『お前の主神、かあちゃんでーべーそ！』って言いながら投げつけない。戦争になるからやらないけど。

(ぬあー……殲滅するのは得意だけど、守るのは苦手なんだよ。指定された場所からして相手はあの「ファミリア」だろうし。はあ……行きたくない)

全身で気怠さを表現しながら行き先を変える。指定された場所は都市の第五区画。繁華街のほぼ中心。

——『フォールクヴァング戦いの野』と呼ばれる、都市最強と名高い「フレイヤ・ファミリア」の本拠地である。



ジークを確認するなり即座に開いた荘厳な門をくぐると、そこには白や黄の小輪が揺れる美しい野原が広がっていた。都市にあるとは思えない原野の奥には宮殿か神殿と見紛う巨大な屋敷が建っている。

(頼む、この女かフレイヤ様が俺に告白するとかであつてくれ！
だって一応ラブレターもあつたし！)

それら一切に意識をやらす、ただひたすら祈っていたジークが目にしたのは美しい女神——では当然なく、二Mモデルを超えるゴリマツチョコの猪人ホアズだった。シヨックで崩れ落ちそうになるが踏みとどまり、膝をガクガクさせながら尋ねる。

「俺に『果たし状』を送りつけたのはお前か、【猛者】オツタル」

「そうだ」

「……ラブレターをくれたのは？」

「俺だ」

「」

「ちよつと意味がわからない。というか理解したくない。全身に鳥肌が立った。膝が折れそうだ。」

「俺、男と恋愛する趣味はねえぞ!」

「違う。あの方に頼んで代筆をしていただいた。お前は女からの誘いであれば乗って来ると踏んでな」

とうとう地面に崩れ落ちるジーク。泣き喚きながら地面を転がり回る。ちなみに「フレイヤ・ファミリア」の団員はいない訳ではなく、壁際によつていただけだ。今ではオツタルとジークを包囲するように円陣を組んでいるため、全員がジークの痴態を見ている。

「嘘吐きー! 純粋な童貞を弄んで楽しいか!? そんなだから『魔法』が一つしか使えないんだよ非童貞脳筋!」

あつ、誰かが『^{エルフ}純粋な童貞があのような店を開くものかモンスター童貞』つてゴミを見る目で言った。……言つてはならないことを言いやがったな。こつちだつて容赦しねえ。

「……一応、『果たし状』はラブレターとも呼ぶらしい」

「そんな神の屁理屈聞きたくない! 俺はな、ラブレターでも告白でもいいから俺のことを好きだつて言つてくれた女の子と交際したいんだよ! 遊んで思い出作つてお互い初めての夜を過ごして、その後でプロポーズするとか夢見るくらい純粋なんだよ! てめえ等穴兄弟と一緒にすんな!」

次の瞬間、大剣が、長槍が、大斧が、大槌が、長刀が、黒剣が、銀槍が、『魔法』が、ありとあらゆる攻撃がジークに襲い掛かった。転がって避けた彼がいた場所が瞬く間に粉碎される。都市を揺るがすほどの衝撃に乗っかって包囲網を脱出した直後。

「金の杖、銀の豎琴。二つの眠りに導かれ、どうか夢の楽園へ!」

速攻で短文詠唱を完成させる。実は「ロキ・ファミリア」を歯牙にもかけずボコボコにできたのはとある『スキル』のおかげだった。今も発動しているのだが、あの夜ほど条件が揃っていない。『切り札』を使えば別だが、遙か上からこちらを観察する視線があるため使わな

い。

「ケリーユケイオン」

代わりに発動するのは当たれば勝ち確定の『催眠魔法』。人数が増えるほど効果が薄くなるものの、Lv. 7だろうが数秒無防備にできる初見殺し。数秒あれば後は簡単である。

オツタル達第一級冒険者をぶん殴り、昏倒させた上で催眠をかける。これではばらくの間は起きられない。男性団員にも似たような処置を施し、女性団員は胸や尻を揉んでから客を選定する魔道具^{マジックアイテム}を使い、適性があつた者には店の紹介状をポケットに入れてから催眠をかけていった。

十分も経った頃にはジーク以外に立っている者はいなかった。低レベルの団員には纏めて使ったとはいえ、詠唱のし過ぎでジークは喉が枯れた。転がっている団員から回復薬^{ポーション}を拝借し、喉を潤しながら上を見る。正確には摩天楼——『バベル』の最上階を。

「いつから俺がLv. を詐称してたことに気付いてたんだろう、あの女神。店に来てほしいエルフがいる酒場にいる鈍色の髪の毛の巨乳の子も『フレイヤ・ファミリア』に大事に扱われてるし……はあ。こいつ等に目を付けられてもいいことなんて一つもないな」

空になった試験管を綺麗に拭き、回復薬と似た色をした媚薬を入れて元に戻し、『戦いの野』^{フォールクヴァング}を後にする。

報告しなければならぬことが増えちゃった。憂鬱な気分になりつつ本拠の近くまで来た時、汗水を垂らすヘルメスが見えた。彼もジークの姿を捉えるなり大声で叫んだ。

「ジーク！ ファルガーがお前の魔導書^{グリモア}を読んだから変になったんだけど！ 具体的には『俺は悟ったのです——男の股間にあるものはこの世で最も不浄だと。故に斬り落とします』とか言い出して俺のブツにまで手を出そうとしてきた！ 何とかしてくれえー！」

（そうだ、【九魔姫^{ナイン・ヘル}】——リヴェリア達のパンツを返してなかった。ど

うすればいいか聞きに行こう)

「おい待て、待つんだ。待てつてば！ ファルガーの奴、零能の俺が一番やりやすいと思つて狙つてるんだよ！ 見つつかつてもおかしくな——あああああつ!? 俺を助けろつ、置いていくなつ、ジークウウウウウウ!!」

◆◆

夜の『ダイダロス通り』。選ばれた者しか辿り着けない扉が開かれ、中から出てきた灰髪の男がくすりと笑う。

「やっぱり来た。あれだけの快楽を与えられて忘れる方が不可能だ。どんな人物だろうと、俺はその欲望を尊重しよう。さあ……どんな風にして欲しい？ エルフの御三方」

ジークに対する評価

・とある旅の神の憂鬱

俺はジークを眷属にした時、下界にやってきてから一番の衝撃と興奮を与えられたと言ってもいい。だって本当に才能の塊だ。戦いに関する才能なんか「ランクアップ」による戦闘能力向上の術がえげつない。この子一人で『救界』を成し遂げるのも夢じゃない、最後の英雄ラストヒーローに相応しいと思っていたのさ。

そう思ってた好きにさせていたのがこのヘルメス、最大の誤りだったよ！ ああ、神の目と頭脳をもつてしても読めなかつたさ。ジークの性欲があそこまで突き抜けていたなんて！ 英雄色を好むと言うし、性欲に制限はないと聞くけど限度つてもものがあるだろ!?

魔導書グリモアの件はギリギリ許せる。「ロキ・ファミリア」でも「超凡夫ハイ・ノービース」が永遠の魔法使いになりかけたと聞いたけど、性欲の完全消失は魔導書グリモアを使用して間を置かずに『魔法』を発現させることが条件だった。「魔法」が使えるようになるのとわかつているのにすぐ「ステイタス」を更新しない神なんていない。その習性を利用した可愛い悪い戯だ。……【貴猫アルシヤ】がマジギレしてたけど。

問題はジークが作り上げた薬品だ。何なんだよ『卵子に作用して神とも異種族とも子供ができる薬』って!?! 神やエルフとドワーフ同士みたいな異種族間では性行為をしても絶対に子供はできない。その法則を『避妊薬要らずで気軽に楽しめるのもいいけど、スリルがあった方がよくない？ あと孕ませって事実が超興奮する!』とかいう理由でぶち壊すなよ！

絶対に量産するなど厳命したけど……無駄になりそうな気がする。よりにもよってミアの酒場の看板娘に話してしまったそうだし。何が『だつてだつて！ 面白いことを聞かせたら気になるエルフの同僚を紹介してくれるって言ったんだもん! ……極上の獲物を見つけたい肉食獣みたいな顔になって怖かつたけど』だよ……泣きたいのは俺だよ。絶対にあの方フレイヤの耳に入ってる。今日呼び出された要件は絶対これだよ。

もう一つの問題作は『擬人化薬』だ。一定時間限定だが、文字通り神だろうがモンスターだろうが人間にする。まあ、こっちは俺の責任でもある。モンスターや犬や猫みたいな生き物が人間になるとスタイル抜群の美男美女になるのがお決まりなんだぜ！　つて教えちやつたからな……。

この薬を最も欲しがりそうなのは『異端のモンスター』達だが、俺はジークにだけは絶対に教えないようにしている。エルフ並に整った容姿をした雌が混じっている——これだけでジークは絶対に気に入る。雄だけなら見向きもしなかっただろうけど。今は極少数で協力体制を築いているが、もし処分を決定した時にジークに敵にならるのは避けなければならぬ。彼の背に刻まれた「ステイタス」を知っているからこそ、どれだけ勝ち目がないのかわかっている。

それにしてもどつちの薬もあの方と『異端のモンスター』を狙っているとしか思えない効果だな！　本当に知らないんだよな？　タケミカツチやアスフィみたいな苦勞人にして背中を煤けさせてやろうとか考えてないよなあ!?

ああ駄目だ、嫌な想像ばかり浮かんでくる。何度か都市の外にお使いに行かせたけど余計な寄り道とかしてないよね？　……そういえば『テルスキュラ』こえー、アマゾネスマジこえー」が独り言になってた時期があつたけど……まさか——

「ヘルメス様！　ジークのアホが『ダインスレイヴ黒妖の魔剣』は目隠れ人見知り美少女、『ヒルドスレイヴ白妖の魔杖』はメス堕ちが似合う！』と訳のわからないことをほざきながら『性転換薬』を持って『フレイヤ・ファミリア』に向かいました！」

そういえばつい最近、『フレイヤ・ファミリア』に襲われて腹を立ててたなあ……きつと一割はその仕返しだろうな(残りは性欲)……俺、今からそこに行かないといけないんだけどなあ……。

儂く笑った俺は、部屋に慌てて入ってきたアスフィに言った。

「後は任せませ、アスフィ！」

「逃げるなこのクズー！」



・ギルドの人気ナンバーワン受付嬢の不満

私、というか私達ギルドの受付嬢には悩みの種がある。ギルドに来るたびナンパをしてくる神ヘルメスの眷属、【灰男】グレイマンジーク・グレイマン氏だ。

冒険者登録を行うために初めてギルドへ訪れた際の印象は最高だった。十三歳という若さでありながら背は高く顔の造りもよくて、澄みきった碧眼で相手の目をしっかりと見て話す。腕っぷし自慢の冒険者は素行の悪い人が多いから、見た目や所作がちゃんとしている少年に私達はとても好感を覚えた。

長年ギルドに勤めており、今では受付嬢のまとめ役になっている狼^{ウエアウルフ}人のローズさんも「あれは大成する。間違いないよ」と太鼓判を押し、『氷の妖精』と呼ばれるほど淡白な態度で有名なエルフの先輩も関心を持っていた。男性のギルド職員の大半が必要書類に筆を走らすグレイマン氏に嫉妬の視線を送っていたのはどうかと思っただけ。

必要事項が記入された書類を私が受け取り、新たな冒険者になったグレイマン氏だったが、私の隣にいるミイシャに笑顔を向けたのだ。ギルド内にいた男性は嫉妬の炎を燃やし、女性はまさか早すぎる恋の芽生えかと胸を弾ませ、ミイシャは新人なのにもう寿退職しちゃうのー!? と顔が真っ赤になった。

ジークは爽やかな笑みを浮かべてミイシャの手を取り、瞳をグルグルさせ始めた彼女に告げた。

「その胸の大きさにノーブラ、いいと思います」

——学生来の友人であるミイシャは小柄にも関わらず胸がある。そしてこの日、寝坊でもしたのか大慌てで来ていた。なら下着を付け忘れていた可能性もゼロじゃない。ギルドの制服は身体のラインが出るけれど、下着の有無までは判断できないから本当にノーブラだったのかもしれない。

でも！ よりにもよって！ こんな時に言う!?

グレイマン氏のふざけた行動はそこで終わらなかつた。笑顔のま

ま生きた石像と化したミイシャから手を離し、私の方を向いてある数値——私のスリーサイズを口にした。エルフならぬエロフの一言も付いてきた。コメント

他の受付嬢にもスリーサイズ、パンツやブラジャーの種類や色、現在の体重と適正体重を告げ終わってから彼は立ち去った。ギルド職員どころか冒険者も固まる中、止まっていた時を打ち砕いたのはロズさんだった。

「……とつとつとくたばらないかな、あのクソガキ」

ギルド職員として決して言ってはならない言葉だったが、誰一人として咎めることはなかった。

あれから五年の月日が経った。グレイマン氏がダンジョンに向かつて大怪我をして帰って来る日は一度もなく、それどころか数人しか持っていない『神秘』の発展アビリティを発現させたLv. 3になっていた。

私達を嘲るような笑みを浮かべてやってくることは腹立たしいし、事あるごとに下着や体重について触れてくることは怒りを通り越して殺意を覚えるレベルだが、一番嫌なのは私が新しくアドバイザーをすることになった冒険者、ベル君と同じ声をしていることだよ！この前もグレイマン氏かと思った同僚がベル君を怒鳴ってしまったことがあったし……。

「エイナさあああああああん!!」

受付をしている人の顔が強張る。善意の塊のような白い少年には笑顔を見たいが、性欲の化身みたいな灰色の青年には笑みなんて見せたくない。でも声だけの現状ではどうすればいいかわからない。私にはその気持ち痛いほどわかった。

それでも私はギルド職員としての矜持で笑顔を作る。どんな性格破綻者でも、冒険者は生きて帰って来ることが一番いい。そう思っているから。

——そんな私は血塗れで走ってくる少年を見て絶叫を上げた。



・【デア・セイント戦場の聖女】の悩み

ヘルメス様から『こいつに命の尊さを学ばせてほしい』と頼まれ、私はジークさんに治療術や薬品の調合法を教えていたのですが……彼に対する悩みが尽きません。

仕事に関して文句は欠片もないのです。薬品の配合法を一目見て覚えるどころか自力で答えに辿り着き、より低いコストで高い効果を発揮する調合法を編み出しましたし、治療術も既に私に準ずるほどの腕となっています。

悩んでいるのは、私や患者への対応です。

子供相手なら丁寧なのですが、患者が大人の男性になると一気に変わります。少しでも態度の悪い相手なら適当な回復薬ポーションを渡すだけで終わらせ、手を出してきた相手は薬草を口に捻じ込んで店から叩き出すのです。

女性相手だと『せくはら』？ が酷い。臀部を見て安産型かどうかを判断し、歩き方で「今日、初夜を迎えたっぽい」と呟き、意味もなく生理周期を当ててきます。治療術も女性の肌に傷を残したくないという以外に、合法的に視姦できるという理由がありました。そんな理由で上をいかれた仲間達が憐れでなりません。

特に悩ましいのが私への『せくはら』です。胸やお尻を私以外にバレないよう見てきますし、飲食物には媚薬に似た成分をした栄養剤を混入してきます……無駄に効果が高くて嫌になる。

この間など疲労回復マッサージを行ってきました。本当に疲労が嘘のように取れましたが……私が抵抗しないのをいいことに、胸や太腿の内側のような性感帯まで触れてきてっ、終いには——！

「あああああああー!!」

「どうしたんだアミッド、疲れてるのか!? 丁度『絶対に淫夢を見るけど快眠できる枕』を持ってきたから休憩がてら添い寝しよう!」

「貴方が原因です!!」

豊饒の女主人

「こちら、^{ステーキ}肉塊と^{エール}麦酒になります」

注文した料理を持ってきてくれたエルフを見る。付け合わせの芋^{ポテト}とともに鉄板の上で香ばしい匂いを漂わせるステーキは非情に美味しそうで腹が鳴るが、エルフ——リユーから降り注ぐ極寒の眼差しが食欲を奪い、胃に悲鳴を上げさせる。

「あ、ども……」

カウンターの隅の一人席に座るジークは言葉少なに礼を告げる。ハッキリ言って彼らしくない。普段の彼なら蔑みの眼差しには指を立て、礼の代わりにナンパをして、厨房に戻っていく後ろ姿をじっくりと觀賞していただろう。注文してないはずの麦酒^{エール}を提供してきたドワーフの主人に「酒は高いから果実水^{ジュース}に出せつつあったらババア！」と変なけち臭さを発揮しただろう。それが何故こうなっているのか？

早い話、初対面の印象が超が付くほど最悪だったからである。

オラリオで人気の酒場『豊饒の女主人』。店員が女性しかいない店はジークの好物である。その中でもリユー・リオンは気高く美しいエルフで、ジークの性癖にぴったりの相手だった。

どうにかして店に来てほしいジークだが、調べてみるにつれて彼女が「疾風」であり要注意人物^{ブラックリスト}一覧に登録されていること、酒場での仕事^{ブラック}が過酷なせいで薄給なのに加えて暇な時間がないこと、薄鈍色の髪の毛^{ヘア}の看板娘が隠れ巨乳なのはどうでもよくなるくらいヤバい人物だということが判明。普通に考えれば前者と最後者が厄介なのだが、ジークにとっては時間がないというのが問題だった。客としての適性検査をする暇がないのである。

なのでジークは『「疾風」だということをバラされたくないならぐへへへ』みたいな真似^{プレイ}をすることをやめた。彼女を調べていることが^{アスフィ}団長にバレて『変な真似をするな』とも言われてしまっている。だから普通に接触して仲良くなり、照れた表情などを見せてもらう方向へシフトチェンジしたのだ。

いい印象を持ってもらうために関わりがありそうな主神ヘルメスにどう接触すればいいか尋ねてみると、

『髪を黒く染めて「久しいな、リオン。お前の『正義』はたった一人になった今、どうなっている?」って言えばいいよ』

ジークはこの言葉を信じて実行した。これが大きな間違いだった。『豊饒の女主人』の面々からの好感度は一名を除いて地面にめり込むどころか、『ワーム・ウェール』に丸?みにされて『深層』まで連れていかれた。リユーは慟哭し、他の店員は殺意に満ち、殴りかかってきたミアを反射的にぶっ飛ばした。好感度が『深層』最大の危険度を誇る『闘技場コロシナム』に転がり落ちた瞬間である。

土下座で謝り倒し、乾燥機能付き全自動食器洗いに油や焦げ目が落ちやすい包丁やフライパン、落としても割れない食器に（シルへ）『絶対妊娠剤』や『擬人化薬』を提供し、元凶ヘルメスを捧げることでなんとか出禁は免れたが……針の筵である。

なにしろ弁明を聞いてもらえないから好感度は低いまま。人の視線で泣きそうになったのはあれが初めてだ。ジークが自分で作った避妊具の使い心地を確かめているところを目撃した団長より酷く、『見て見て、遠隔で女を孕ませる魔道具マジックアイテム作った! これでコウノトリが赤ちゃんをお腹に運んでくると信じている箱入り清楚美少女の純真さは守られるよ。試してみたい?』と聞いた時のアミッド並に酷かった。

——まあ後者はわかる。魔道具マジックアイテムの対象設定は血液だったのでいくらでも悪用ができるし、子供を産む際に内側から処女膜が裂けるという地獄みたいなことも起きる。ヘルメスが古代遺跡から苦労して持って帰ってきた時空間連結の『天授物アーティファクト』を使っていたけれど、壊したアミッドを責める気になれなかった——。

そんな訳で『豊饒の女主人』ではジークは大人しく飲み食いするしかないのだった。

「——では、こちらにどうぞ」

柄にもなくしよんぼりしながら肉を食べているとジークの隣の椅子が引かれる。目を向けると白髪の少年がいた。ギルドの支給品で

ある短刀を装備しているので冒険者だと思うが……可愛らしい顔つきをしている。女の子だったら悩むことなく声をかけていただろう。今から女の子にしてやろうか？

するとぼつ、と少年がジークの方を見た。気取られるような視線は向けていなかったのに……意外な才能だと思いつながら隠すことなく少年を見返す。

「どうか思い出した。たしかこいつは……」

「爺のま……じゃなくて。ベル・クラネルだな」

「な、なんで僕の名前を？」

「お前が冒険者になってからギルドで口を開くなって言われたんだよ。声が似すぎて紛らわしいからって」

「あ！ も、もしかして……『残念なイケメン』^{ランキン}順位一位、『教育に悪い冒険者』^{ランキン}順位一位、『才能の無駄遣い』^{ランキン}順位一位の、『童帝』の別名も授けられた『灰男』^{グレイマン}ジーク・グレイマン？」

「なんだその順位。出処を教えろ。ブサイクか同性しか愛せなくなるようにしてやるから」

戦慄の声を漏らした兎^{ベル}が逃げようとするが遅い。腕を挿んで椅子に座らせ、長年の友のように肩を組む。これでもう逃げられない。さて、どうしてくれようか……ガタガタと震えるベルを凝視していると、頭が軽く叩かれた。

振り返ると両手をお盆で持ったシルが立っていた。その目は自分の獲物^{ベル}から手を離せという獣のようだった。仕方なくベルを解放すると、なんとこの男、恐怖で頭がおかしくなった兎のようにシルの胸元に飛び込みやがった。笑顔のシルに撫でられるベルの姿に、今度はジークの目が獣のように変化する。

「よしよし。ベルさん、怖かったですねー」

「……」

「ジークさん、今の貴方は原初の幽冥を司る神様が相手を甚振る時の顔とそっくりです。ベルさんを怖がらせないで下さい」

「……害を与える気は最初からない。あと腹立つから胸に兎を挟むのやめろ」

これは本音だ。ベルに危害を加える気はない。自分の身体に流れる血が訴えているのだ。こいつに手を出せば超短文詠唱よりも速いパンチが飛んでくると。意味不明だ。とんでもない血縁がいるのか、親世代に因縁があるのか。どちらもありそうで怖い。

食事を再開したジークの隣に顔を真っ赤にしたベルが戻ってきた。自分のした行為に恥ずかしがっているようだが、むしろ青くなるべきなのでは？　と思う。ベルが挟まっていた胸の谷間の女はジークから定期的にエッチな薬をもらっているド淫乱だ。信念に反するので拒否したが、『惚れ薬』の作成も依頼してきた。

そんな肉食獣の牙から逃れたはずのベルはそわそわと身体を揺らしている。今度はジークに怯えているらしい。……仕方なく緊張をほぐしてやる。決して脳裏に過ぎる謎の灰髪ゴスロリ美女に怯えた訳ではない。

「おい」

「うえっ？　な、なんででしょうか、グレイマンさん」

「そんなに怯えるな、あとジークでいい……なんでオラリオに来たん
だ？」

「え？」

「お前も料理が来るまで暇だろ？　だから俺の暇つぶしに付き合え」

「え、えーつと……」

「もちろん俺も話す。なんなら何十人も女を墮としてきた俺の技術
を教えてやろう」

「!!」

食いついたな。ジークは内心で獰猛な笑みを浮かべる。危害は加えない。だが玩具にしてやる。俺を差し置いていい思いしやがって。今までの反応で初心だとわかった。お子様には早すぎる猥談で夜も寝られぬ身体にしてくれるわ——!!

「墮とただけですよね？　本番は怖くて手を出せなくてすぐフラれてるって知ってますよ」

「おい、カッコつけてるんだからやめてよ！」

「というか何故知ってる。誰だ、誰が教えやがった？　ジークの中で

靄が徐々に形を成していき、ギルドのハーフエルフになった。あの女か！

ベルのジークを見る目が一気にぬるくなった。仕方ない奴とでも思ったのか、苦笑を浮かべながら話し始める。しばし聞き役に徹していたが、こちらから話した時の反応が子気味良く、いつの間にかジークが話すようになっていた。

「砂漠の国には奴隷市があつてな。奴隷に身を墮としても曇らない気高さのある美少女がいないかと思つて纏め買いたんだが、その中に王子がいたんだよ。そのまま成り行きで手を貸すことになつてだな。頭の固い奴だったけど、夜のオアシスで下ネタをぶつけたら真つ赤になつたり、初めてやる相手の得意なゲームでボコボコにして半泣きにさせたけど、最終的には仲良くなつて別れたよ。今でも偶に会いに行つてる」

「アルテミス様つていう女神とその眷属をカツコ良く助けたんだけどさ……『大丈夫かい、可憐なお嬢さん達』つて言うはずが、この時の俺は『ホンネミエール』という新薬の効果を確かめていてな？

『ひゃっはー！ 綺麗な女の子ばかりだ！ 俺とこれから気持ちよくて楽しいことどうですかムフフ！』と叫んじゃつて……『感謝する醜い豚野郎近寄るな消え失せろ！』つて養豚場の豚を見る目で罵られた。でも眷属の子達とは仲良くなつたんだぞ。女神様に恋を知つてほしいという願いを教えてもらうくらいにね。俺の勤もあの女神はむつつりだと囁いていたから『ホンネミエール』をあげた。あれで素直になればいいんだが、神の精神構造は人と違う。普段とかけ離れ過ぎた本音だつたら、もしかしたら分身くらいするかもしれない」

「俺つてなんでモテないんだらう。強くてイケメンで金持ち。女の子が好きな三大要素を兼ね備えているのにだぞ？ 顔やスタイルも具体的数值を付けて褒めてるし、優しく、時に厳しく現実を突き付けているのに……」

おかしいな。最初は知らない英雄譚を開くようなわくわくとした表情をベルはしていたのに、今では厳めしい本の表紙で偽装したエロ本だったと知ってしまったような表情になっている。『ダイダロス通

り』のガキンチョに同様の顔をされたことがあるジークにはそれがわかった。

どうにかして威厳を取り戻さねばと悩んでいると、十数人規模の団体が酒場に入ってきた。その団体に興味がなかったため思考を続けていたが、団体を見たベルが百面相をしながらカウンターに伏せるといふ奇行を始めたため確認する。

多種多様な種族が入り混じる一団——「ロキ・ファミリア」だった。ジークが協力した『遠征』の宴をやると思っていたがここでやるとは知らなかった。何故なら『あの事件』のせいで酒が不味くなるからと宴からハブられていたからだ。

隣にいるベルやシルが驚くほど気配を消して様子を窺う。とても楽しそうだ。即効性の下剤を混入させて大惨事にしてやりたいという気持ちがムクムクと膨れ上がり、見た目はいい女を見て股間がムクムクした。心の中の天使と悪魔、どちらに従うべきだろう。とても悩む。

悩んでいる内に盛り上がったのか、酔っているベートの声が聞こえた。

「そうだ、アイズ！ お前のあの話を聞かせてやれよ！」

耳を傾ける。どうやら『遠征』の帰りに発生した『ミノタウロス』の大量発生の話のようだ。ジークは『中層』で逃げ回っていた個体を処分していたのだが、なんと『上層』の5階層まで逃げ込んでいたらしい。

最も逃げた個体をアイズが始末したらしいが……今の話によると、駆け出しの一人が殺される寸前だったとのこと。その冒険者は全身に『ミノタウロス』の血を浴び、真っ赤になりながら叫んで逃げ出したらしい。それがおかしくて笑えると。

今の話を聞いてアイズとリヴェリア以外が笑っているが、粋がった馬鹿が『中層』で死にかけたならともかく、適性階層である『上層』を探索していた新人冒険者に『ミノタウロス』をけしかけて殺しかけておいて何故笑えるのだろう。不思議だ。そんな女を屈服させるのは楽しいけど、男はぶっ飛ばす以外にやれることがない。

「……ん？」

隣のベルの様子がおかしい。シルが何度呼び掛けても反応しない。サイコパスの気がある。「ロキ・ファミリア」に怯えているのだろうか？

「【ロキ・ファミリア】に委縮してるのか？ 強さにかまけて婚期を逃し続ける行き遅れの集まりだと思えば怖くないって。むしろ笑えるだろ？」

とびきりの冗談ジョークにも無反応。これを言って笑わなかった奴はいないのに——全員引きつった笑いだったけど——ジークはベルの笑いの沸点の高さに戦慄する。

「雑魚じゃあ、アイズ・ヴァレンシュタインには釣り合わねえ」

ベルが椅子を飛ばして立ち上がり、殺到する視線を振り払うように走って出て行った。うつむき加減に伏せられた前髪の奥で光った滴を見て、ジークは「ロキ・ファミリア」の酒の肴にされていた人物の正体を悟った。

ベルが憐れだと思う。ベート達に不快感を感じてもいる。しかし、ジークは何もしない。ベートが嘲笑したい以外の目的で酒の肴にしたことを知っているからだ。あるとすれば「言っただけいいことと悪いこととの区別もつかないのか」と注意するくらいだろう。

困惑したざわめきが燻る店内をよそに、ジークは麦酒エールを口に含み、

「そーいやジークの野郎がよ、アバズレに服を剥かれて犯される寸前になっただぜ」

「言っただけいいことと悪いこととの区別もつかねえのか、この童貞狼チエリーウルフがっ
!!」

秘密にしてって言ったのに！ 高い肉だって奢ったのに！

【凶 狼】^{ヴァナルガンド}に腹が立つたら神の前で童貞か否かを尋ねたらいいって噂を広げなかったのに！ 信頼して制約もかけなかったのに！

そこから先は限界を突破した羞恥と怒りでよく覚えていない。でもなんか疲労感だけあった。



「俺あ自分の目が信じられなかったぜ。L v. 5の【凶 狼】^{ヴァナルガンド}の股間をL v. 3の【灰男】^{グレイマン}が蹴り上げていたからな。酔っ払って幻覚を見たってのがまだ信じられる」

「しかもよ、奴は次に何をしたらと思う？ 白目を剥いて倒れた

【凶 狼】の首に指を当てて『し、死んでる……!?』って言ったんだぜ」

「挙句の果てに【道化の侍者】^{ロコライト}に対して『まだ間に合う！ お前に治療師の矜持があるならこいつの○○○を胸で挟んでこするんだ！

それで子供も作れたら治療完了！』って弩級の『せくはら』をかましたんだ」

「後は語るまでもねえ。【ロキ・ファミリア】の女達に蹂躪されて、

【九魔姫】^{ナイン・ヘル}と【千の妖精】^{サウザンド・エルフ}と【純潔の園】^{エルリーフ}の潔癖三銃士にどこかに連

れていかれたんだ。恐ろしい目にあつたに違いないのに、奴は生きていやがった。命知らずなんて口が裂けても言えねえ……誰だって『偉業』だと認めるだろうよ」

後にジークの【ランクアップ】の知らせが都市を巡った時、男性は例外なくその『偉業』を称えたという。

24階層への依頼

「王女は執務に追われ続ける日々に疲れ切っていた。「早く嫁に
け」「女らしい趣味の一つでも持て」と言うくせに城から一步も出さず
仕事を自分に押し付けて遊び惚ける矛盾だらけの国王、申し訳なさそ
うにするだけで手を貸そうとはせずには仕事を持ってくる臣下、自分達
の生活を維持している王女の功績を知らずに国王達ばかりを褒め称
える国民。積み重なり続ける疲れは彼等彼女等に怒りを燃やすこと
すら許さず、このまま国のために人生を使い潰すのだろうと王女は考
えていた。しかし、ある日城に誰にも気取られることなく侵入してき
た男によつて、王女は己が「女」であることを自覚させられた。男は
侵入者に呆然とする王女を寝台に押し倒すと〇〇〇を×し、△△△△
△から□□□□の「ピーツ」を——」
「やめてええー！ もう勘弁してくれよー!？」

ダンジョン18階層、『リヴィラの街』の北部にある長大な水晶の谷
間が形成された群晶街路付近の裏道。ごつごつとした岩壁に空い
た洞窟を利用して設けられた『黄金の穴蔵亭』という名の酒場。

そんな扉も仕切りもない空洞で運営される酒場では犬シアンスロープの少女
——ルルネが泣き叫んでいた。彼女は両手を後ろにして椅子に縛り
付けられ、顔を真っ赤にしながらもじもじと股をこすり合わせてい
る。

周囲には酒を飲んでいるヒューマンや賭博に興じる獣人達がいる
ものの、全員が目を逸らしている。他人だから関わらないのではな
く、身内事だからこそ関わりたくない——それがこの場にいる者の総
意だった。早い話、客は全て「ヘルメス・ファミリア」であった。

少女の大声を至近距離で聞かされたジークはそれまで朗読してい
た自作の官能小説グリモアを閉じると、ルルネに指を突き付けながら口を開
く。

「お前が金に目がくらんだせいで訳のわからん依頼を受けるはめに
なったんだろーが！ これで夜になるまで終わらなかつたら娼館の
予約がペアになるんだぞ？ 夢い姫様系狐人ルナルのあの子が汚いおっさ

んに抱かれたら責任取れんのかっ、おおん!？」

「金については悪いと思うけどさ、娼婦ならもう何回も身体を売ってるだろ。一人二人増えたところで変わりたくないか……?」

「この駄犬がよお! 天才の俺がその対策をしてない訳がないだろうが! 『ユニコーンの角』で作成した処女かどうかを判別する魔道具^{マジックアイテム}であの子が未経験だつてことは把握してるんだよ!!」

超貴重な『ドロップアイテム』と五人も発現させていない『神秘^{レアアビリティ}』を何に使ってるんだ、という同じ派閥の団員からの視線を意に介さずジークは叫ぶ。彼は性癖を拗らせた可哀想な生物なのだ。

抱く女の子は処女がいい。野菜が初めてならともかく、他の男が抱いた後とか嫌だ。それと情事の上手さを比べられて「彼の方がよかつた」とか言われたら衝動的に自殺しそうな気がする。色んな理由でジークは未経験の女しか抱くつもりがなかった。

「前までは俺の上半身を見るだけで泡吹いてたけど、やっと胸を触らせてもらえるところまで来たんだよ。ここまで稼いだ時間と好感度を他の野郎に奪われると考えただけで腸が煮えくり返るわ! 暇つぶしも兼ねてお前を『性感帯を刺激されてもないのに絶頂したクソ雑魚雌犬』にしてやるから覚悟しろ!」

「や、やだっ、あああああ——!?!」

暇つぶしなんてあんまりだ、と言うこともできずに悶えるルルネ。周囲では巻き添えを喰らった者が前屈みになって震えている。聞きたくないけど聞きたい、動いたら達してしまいそう……色んな理由で誰もジークを止められない。止められそうな団長^{アスファイ}は非情にも声の届かない場所へ一人避難していた。

ちなみにアスファイが逃げるのもジークの計算の内である。今読んでいる魔導書^{グリモア}は普通の枕を『淫夢で快眠枕』にすり替えられたことに気付かないまま寝たアスファイの部屋に、開錠行為^{ピッキング}で侵入した時に考えたジークの新作だ。『豊饒の女主人』の看板娘に一冊魔導書^{グリモア}を提供してしまったため、在庫補充も兼ねて書いたのだ。誰にもバレてないだろうと思つてこっそり性欲を満たそうとする彼女の姿が最近の楽しみである。バレたらぶち殺されるだろうが、死が怖くてエッチはでき

ない。

閑話休題。

報復と暇つぶしでルルネを調教しているジークだったが、一つだけ不満がある。ルルネでは満足できないことだ。ぶつちやけると合格ラインに到達していない。ハイレベルな美少女でなければ我儘なジークの性欲は満たされないのだ。

しかし、アスフィは駄目だ。高確率で悪戯がバレて殺される。エルフの団員はジークの調教と暗示療法の腕が一流だったせいで、合言葉と一緒に指を鳴らせば性欲に忠実なメスに変身するようになってしまう。それはジークの趣味じゃない。小人族もイエスロリータ、ノータツチである。

一切休みを入れずに朗読を続けたジークはあちこちから香りだした青臭さに顔をしかめると、息も絶え絶えのルルネに声をかけた。

「おい、ルルネ。やめてほしいか」

「……たのむ、もうやめてえ……あたま、へんになる……」

「そうかそうか。なら俺の質問に答えてくれたら解放しよう。なに、一つだけだ——お前等、俺に何を隠している？」

ジークはまったく目の笑っていない笑顔で尋ねる。馬鹿みたいに緩んでいた空気が瞬時に張りつめ、「ヘルメス・ファミリア」の団員の表情が凍り付く。

「おかしいと思ったのは今回の依頼に『援軍』が送られると知った時だ。ルルネ、お前に協力を要請してきた黒ローブは「ファミリア」のL.V. 詐称を知っていたんだろう？ どっかの「ファミリア」やギルド長の手下ならL.V. 詐称を知った時点で罰金を奪いに来たはずだ。そうせずに依頼を託すための脅しに使ってきたなら、十中八九、そいつはギルド長の更の上……ウラノス様の手駒とかだろう。それ以外にこんな真似をする意味がないし、うちの「ファミリア」の秘密がバレるとは考えにくい」

「……」

「ヘルメス様もその辺りは織り込み済みだろう。むしろそうしてギルドだけに有用性を示そうと考えていたはずだ。なのにL.V. 8

がいる集団に援軍？　つまり……ヘルメス様はとびっきりの取引材料になる俺を徹底的に隠していることになる」

「……」

「ヘルメス様は何を危惧している？　俺の強さが規格外なのは今更だ。エロい発明品なんかはもつと今更だ。なんていうんだろうな……俺の強さがギルドに知られることじゃなくて、知られることで任される極秘任務が不味い感じか？　いや、強さよりも俺の性格……綺麗な女の子が好物なところかな？」

「……」

「ヘルメス様で他に気になることは……ああ、『異種族妊娠薬』と『擬人化薬』を見せた時の反応だ。俺の性への情熱にドン引きするというよりは、俺が何かを知ってしまったんじゃないかっていう表情をした。『擬人化薬』はデミ・ヒューマン 人や神が使えばヒューマンに、犬や猫みたいな動物が使えば最も特徴に近いデミ・ヒューマン 人になるけど——モンスターには試したことがないな。絶対に使うなと命令されたから」

ジーク・グレイマンは天才だ。女好きで天才だ。

アスファイが誰にも話したことがないはずの彼女の過去をエロのためを知る調査力。『くっ殺の館』に訪れる客の深層心理に眠る複雑な願望を正確に見抜く観察眼。いい女を見逃さないために培った美少女センサー 超直感。

性欲を満たすためだけにLv. 8へ至った怪物が、『新異端のなモンスター』を隠そうとする団員に気付かない訳がない。今回の依頼だつて夜までに間に合わせる自信があつた。にも関わらずルルネを辱めたのはアスファイやヘルメスがいないこの状況を作り出すためだ——暇つぶしだったのも本当だが。

きつとここにいる大半が何のことかわからないだろう。確実に知っている団長と主神からはジークでも情報を抜き取るのは困難だ。だが……いくら面倒事を持つてくる馬鹿でも、盗賊としての腕は派閥内でトップクラス。ヘルメスもその腕を認めていくつもの機密文書の運搬などを任せている。知らないはずがない。

隠すことは許さない——言外に告げてくるジークの視線にルルネ

は冷や汗が止まらなかった。状況の変化が目まぐるしすぎてついていけない上に、白を切ることもジークにはできない。頼みの綱のアスフィは援軍が来たと呼びに行くまで来ない。他の者もジークの圧と前屈みな姿勢と賢者タイムで動けない。

万事休すか。全てを諦めたルルネが口を開きかけたその時。

「……………ルルネ、さん？」

全員が入口の階段に目を向けた。そこには驚愕の眼差しを注ぐ金髪の美少女、アイズ・ヴァレンシユタインがいた。

今の状況を整理しよう。

客が全員変な香りを漂わせ、一人の少女が椅子に縛られて顔も下半身も大惨事。その女の子の前には下手人と思われる唯一無事な男。

既視感だ。そして前回と絶対的に異なる点が一つ。ここはジークの店じやない。『合言葉』を言わせる手筈のドワーフの主人は猥談にやられて気絶中。

すらりと剣を抜くアイズ。ジークの顔から滝のように流れ出す冷や汗。「目覚めよ」の詠唱とともに風を纏った少女は床を蹴った。

「ツツツ!!」

「ぎゃああああああ!?!」

振り下ろされた猛り狂う風の刃を格好つけて真剣白刃取りをしたジークはズタボロになった。

ジークの過去

「——という夢をお前は見た」

「私は……そういう夢を見た」

「お前は酒場にやって来るなり、謎の眠気に襲われて倒れた」

「私は……眠くなって倒れた」

「起きてもカウンターに座っていることを気にすることもなく、店主に注文を聞かれて『合言葉』を告げる」

「私は……気にしない。合言葉……言う」

「オーウ……イエーア」

「オーウ……イエーア」

明らかにアイズが口にしそうにない言葉を言わせても抵抗しない。完璧に催眠にかかっていることを確認したジークは、人形のように脱力して椅子に座るアイズの前で肩の力を抜いた。

周囲では「ヘルメス・ファミリア」が総出で証拠隠滅を行っている。出てしまった体液を拭き取ったり、服を着替えたり、アイズの風で壊れた酒場の備品の修理など、便利屋の名に相応しい手際の良さである。ジークも『スキル』を発動させて傷を治し、ドワーフの主人に催眠を使い、服も変えていた。

先程までの出来事を覚えられていたら『豊饒の女主人』の店員並に嫌われてしまう。そうなってしまえば関係の修復は不可能になる。アイズのような美少女と仲良くなれるかもしれない未来を捨てる気はジークになかった。故に剣を受け止めてすぐに意識を刈り取り、記憶の改竄に移ったのである。

それにしても……ジークはアイズの顔をじつくりと眺める。モンスターと戦っている時はひたすら能面のように無表情だが、催眠の影響で力が抜けている今の顔は年相応の可愛らしさがある。またとない機会だし、今のうちに仕込みをしておくべきか……？

「くそお……『催眠魔法』を使っている時は犯罪者臭がプンプンしていたのに、なんで【剣姫】の胸を凝視するのは絵になるんだよ」

「イケメンだからだろ。下心丸出しなのに『隠そうとしないのが逆に

「イイ!!」って好意的に取られるのは見た目がいい奴だけ。俺等みたいなのが同じ真似すれば【ガネーシャ・ファミリア】に突き出されて終わりだ」

「こうなったら催眠に割り込んで【劍姫】を俺に惚れさせて——」

「殺すぞ」

「すみませんでした!!」

ジークの冷え冷えとした眼差しに口を滑らせた団員が頭を下げる。謝罪されても目を逸らさないことで虐めるジークだが、震える仲間が可哀そうになって動いたのか虎フータイガー人のファルガーに手刀チョップをされて視線を切った。

「まったく、これから面倒な依頼をこなさないとイケないのにこれ以上消耗させるなよ。……というかジーク。以前から気になっていたんだが、なんで催眠で惚れさせることはしないんだ？ 惚れ薬も開発しようとする様子がないし」

「誰だって嫌だろう、偽りの気持ちを植え付けられて愛を育むなんてさ」

全員が勢いよくジークを見た。なんだその「おまいう」みたいな目は。不機嫌そうに眉を顰めるジークに顔を引きつらせたファルガーが再び声をかける。

「……本気で言ってるのか？」

「本気だが」

「快樂責めで絶頂させまくって調教するのはアリなのか？」

「本人が快樂に正直になった結果だからな。罪悪感を覚える訳がない」

結果がわかりきった女なんぞつまらない。誰だって最初から股を開く女より靡かない高嶺の花を屈服させたいだろう。性の快樂に屈して憐れな存在に成り下がるのか、それとも精神の強さを見せつけるのか——どちらにしろ楽しめる。

まだ何かを言いたげなファルガーに魔導書グリモアを指で示す。今度こそ永遠の賢者にしてやろうか？ という意志が伝わったのだろう。慌てて他の場所で証拠隠滅をするエルフローの団員エを手伝いに行った。

自分が原因とはいえ協力しながら活動する仲間達の姿に、ジークはとある人物のことを思い出しそうになった。しかし、アイズが意識を取り戻したことで中断され、呼ばれたアスファイが出発の命令を出したことで忘れ去られた。

アイズが起きるのがもう少し遅ければ、アスファイがもう少し時間をかけて24階層へ向かう命令を出していれば、ジークは思い出していただろう。

——ジークが強くなろうと誓った、忌まわしき過去の記憶を。



ジークが天涯孤独になったのは三歳の頃である。この時既に明確な自我を持っていた彼は合理的判断や理知的な言動をすることができたが、親が死んで即座に一人暮らしができるようになったりはしない。

だって三歳だ。一目で完璧に物事を覚えられたとしても知れる情報の量に限度がある。身長の高さは料理洗濯炊事の足かせになるし、病気になっても治療薬を作ったりはできないし、子供だからと舐められて理不尽な目に合うこともある。ジークが天才であるのはそのことをはつきりと理解していて、それを解決するために動いたからだ。何をしたのかというと、父の知り合いで目ぼしい人物をリストアップして訪ねたのである。子供を憐れんだ老夫婦が拾って育ててくれるなんて夢は見ない。どこまでも自分の能力でできる範囲で行動する。

こうしてジークは父の所属していた「ファミリア」と腐れ縁だったらしいエルフと数年一緒に住むことになった。

彼女の名前は知らない。教えてもらえなかったから「おい」や「あんた」と呼ぶしかなかった。彼女はかつて冒険者だったらしいのだ

が、とあるモンスター『猛毒』を浴びてしまったせいで戦線離脱を余儀なくされたそう。そのせいで彼女の仲間達が死んでしまった戦いに参加できなかったことを悔やみ、人知れず朽ちていこうとしていたところにジークは転がり込んだ訳だ。生きるためだったので罪悪感は無かった。

彼女は美しく博識で強い人だった。一緒にいるだけで幸せな気分になれた。薬学の知識や戦いの基礎などは彼女に教えてもらった。彼女も薬学では突き抜けた才能故に誰も付いてこれなかったため、天才であるジークとは話ができて楽しそうだった。

何より彼女は同性愛者おんなずきだった。酔っ払うと獣人の女は耳や尻尾が敏感だの、エルフは冷たい表情が緩む瞬間がいいだの、酒を買いに行った時に見た街娘が可愛かっただのと……ジークの女好きは彼女の影響が大きかったのかもしれない。

——大切な人だった。ずっと一緒にいたいと思ってた。薬学だって彼女のために頑張っていた。……初恋の人だった。

幸せな日々が続くと信じていたジークが彼女を驚かせようと隠れて開発していた発明品を持って家に帰った時……彼は、情緒や感情をぐちゃぐちゃにされた。

——初恋の人がチ○コ生やして同じようにチン○生やした超絶美少女と情事にふけていた。

うん、聞いたことはあった。彼女が何度か『女のままチ○コ生やして女の子を犯したい。逆も可』と言っていたのも覚えてる。手伝いの一環で性転換の薬を作って提供したりもした。でもこれはない。微塵も興奮できない。脳が破壊される。吐き気が止まらない。

完全に男になっているならまだよかった。でも女神に匹敵する美

貌とスタイルを持ったまま美女二人の股間から生えたチン〇。無駄にでかくてグロテスク。世界で最も貴重な食材がオツサンの臭い足で踏みつぶされた気分だった。

そして彼女が吐いた次の言葉が、ジークを絶望のどん底に叩き落とす。

『男ってこんなに気持ちいいことしてるのか。……そうだ！ ジーク、お前の尻の穴でやらせてくれよー。男がメス落ちするのを見たいんだあ』

全力で逃げた。何度も後ろの穴を犯されかけた。生涯で最も絶望して、最も涙を流して、最も知恵を振り絞ったのがあの日だった。

後に彼女とまぐわっていた女性がジークの元へ訪れ、死ぬ瞬間を大切な家族に見られたくないがために一芝居打ったと聞かされたが、

『他にもっとやり方があるだろうが馬鹿野郎おおおおおおおおおおおっ!! 初恋は叶わないって言うけどこんなにあんまりだろうがよおおおおおおおおおお!! あといつまで生やしてるんだそのスカートを持ち上げているブツはよおおおおおおおおおおおおお!!』

それ以来、ジークは自分以外の男性器が見れなくなった。どうしてもチ〇コの生えた彼女——神によるとふたなりエルフ——に襲われる光景を思い出して気絶してしまう。性転換薬も男を女にするものしか作っていない。攻めの女性が苦手になったのもこれが原因だ。

しかし、ジークは考えてしまう。あの日、自分が彼女より強ければ未来は違ったんじゃないか。力があれば自分が彼女の生きる理由になれたんじゃないか……と。

だから、天才故に強さを不要とし、知識こそが理想を叶えるものと考えていた少年は強くなると誓ったのである。



「——で？ それが赤髪レの女サイや閹派閥イルの残党の女性の衣服を肌には一切傷を付けることなく乳房と女性器だけ見えないように斬り刻んだ

拳句、胸と尻を私達が必死に戦う横で堪能し、敵が自爆したせいで目の前に降ってきた男性器を見て泡を吹いて気絶してお荷物になった言い訳ですか？」

「敵なんだからそれくらいいいじゃん！ 偶然を装ってアスファイ達の服もやってやろうかなって考えたけどやらなかったし！ あとあの光景はマジでトラウマになるからね！ リヴェリアやアイズに置き換えてみたらわかると思うから！ というかホモになったり女性恐怖症にならなかつたことを褒めろよ。ホモだったら多分「アポロン・ファミリア」に入ってたぞ。オラリオが汚い薔薇の咲き誇る都市になつていたかもしれない未来を変えたんだ！ 俺は英雄なんだ！」

「――」

「本当に気絶した……え、嘘じゃないんですか？」

壁上での訓練

妙なことになったな、と夕日を浴びるジークは思った。

「ベル君っ、さっきからボコボコにされまくってマゾにならないか心配なくらいなんだけど、大丈夫かつ!？」

「だっ、大丈夫ですッ!？」

オラリオを囲む市壁の上には白髪の少年と金髪の少女、灰髪の青年と黒髪の幼女神がいた。壁の上では少女が少年を剣の鞘で変な趣味に目覚めてしまうのではないかというくらいタコ殴りにしており、その光景を壁の隅にいる青年と幼女神が時折ヤジを飛ばしながら眺めている。

話は24階層の事件の三日後まで遡る。過去のトラウマを見てしまったことでお荷物になっていたジークだが、気絶するまではしっかりと働いていた。新種の食人花を全て受け持ってパーティーの消耗を抑え、闇派閥を文字通りの丸裸にすることで自爆装置の存在を教え、Lv. 5相当の白髪の男を瀕死まで追い込んだ。

この働きがなければ死者が出ていたかもしれないなかったためにアスファイから得た情報を共有してもらえたのだが、同行していたアイズに頼みごとをされたのだ。

強くしてほしい、と。

ジークが気絶した後、赤髪の女とはアイズが戦った。「ランクアップしたお陰で終始優勢に戦えたものの、レヴィスが白髪の男——オリヴァスという名の怪人の『魔石』を喰らってからはほぼ互角になったそうだ。決着は付かなかったが、いずれ来る再戦に向けて強くなりたいとアイズは考え、彼女の知る中で最も強いLv. 8に頼み込んだのだ。

ジークはそれを承諾し、隠れ家であるこの市壁の上に来るよう言ったのだが……何故かベルを連れてきた。なんでも以前迷惑をかけてしまったから、その償いとして戦い方を教えるとのこと。

美少女との訓練時間を削られたジークは怒った。戦闘中に気を逸らさない訓練と称して声帯模写や『催眠魔法』を使って嫌がらせをし

まくった。

『フツ……俺は孤独が似合う一匹狼の狼ウエアウルフ人。男前だ』

『こんな場所に雨に濡れたウサギが……よし、家に連れて帰って飼ってあげよう。ボコボコにして鍛えてあげよう』

『ボッコボコのギツタギタにしてすまなかつたな、ウサギさん。よし、家に連れて帰って飼ってあげよう』

ベートの声で彼が絶対に口にしないセリフを言ってみた。ベルもアイズも動揺し過ぎたせいでベルが気絶しまくり、訓練にならなかった。

『ティオネー、愛してるー！ 本当は君との子供が欲しくてたまらないんだー！』

『僕は一族の再興という使命のために尽力している。パルウム仮面と名乗って世間の人気を求めたこともあった……でもあまり意味はなかった』

『親指にティンツと来たああああああ!!』

フィンの声で全力でふざけた。どこかで愛に燃えるアマゾネスの雄叫びが上がった。今度はアイズだけが動揺し続け、ベルがたくさん気絶した。

『エイナさん大好きー！』

『はあい、ベイバーたち！ セクシーサンキュー☆』

『ヘステイアママア〜！ ボク、すっごく頑張ったんだよ〜！ ご褒美に、膝枕をさせてえ、頭をヨシヨシしてほしいなあ〜！』

ベルの声で恥ずかしいことを叫んだ。ヘルメスから聞かされた母性溢れる女神ナンバーワンにしたおねだりだが、やったジークも恥ずかしかつた。ベルが羞恥と衝撃で気絶した。

アイズにじやが丸くんから「お前は俺のこと好きみたいだけど、俺はお前のこと、あんま好きじゃねーから」と言われる催眠をかけた。シヨックでアイズの手元が乱れ、ベルが気絶した。アホなんじゃないかと思った。

ベルにアイズから「……気持ち悪い。とにかく嫌い。近付かないで」と拒絶される催眠をかけた。シヨックでモロにアイズの攻撃を受

け、壁の上から落下しそうになった。常に上から刺さる銀の視線が痛かった。

まあ、こういった嫌がらせは訓練にならないからやめろと言われて初日で終わっている。今やっているものといえば、気絶したら『淫夢で快眠枕』でベルにイキ恥を晒させ、その間にジークがアイズの相手をしているくらいだ。

そして訓練五日目の今日、昼寝の訓練をするとかいうアイズの寝言で昼寝をすることになった際、ベルが寝ているアイズを襲いそうになり、それをジークの催眠のせいなのではないかと疑いをかけてくる以外に何も無いと思っていたら、昼飯を買いに行った二人がロリ巨乳を連れてきた。

で、今に至る。

ヘスティアが来てからベルは一度も気絶していない。ヘスティアに声帯模写を披露した時、彼女のリクエストに応えたセリフを聞こえる声量で言っても気絶しなかった。耐性が付いてしまったみたいで残ね……訓練の成果が出てよかった。

ちなみに神であっても、見た目がロリなヘスティアにジークが変な真似をすることは無い。それに彼女はヘルメスとは比べ物にならない神格者だった。男女二名の唾液を混ぜ合わせ、外気に接触させずに摂取すれば莫大な栄養と発情作用、妊娠率増大の効果がある希少な果実を栽培している話をした時、「なんて頭の悪い食べ物なんだ……」みたいな目で見られたが、好感の持てる女神だ。無言でジークが「ランクアップ」を果たすほどの偉業と認められた効果を持つ薬品を複数渡すと、彼女は無言で受け取っていた。

話題に挙げた果実は『深層』の『闘技場』コロシウムと呼ばれる超危険区域の地下で栽培している。カップルや子供に恵まれない夫婦には人気のある品なので、絶対に盗難されない場所に栽培所を作ったのだ。それに、あそこに極限状態で心の距離がぐっと縮まった男女がやって来たら最高の展開になるだろう。その時を想像すると酒場のエルフが思い浮かび、何故かベルに殺意が湧いたが、頭を振って消した。

ジークがリユーに好かれる可能性は皆無になっている。とある一

件から入手した『呪詛の聖典』という呪われてるのか祝福されてるのかわからないモテない女の怨念が宿った本が頭の悪い事件を引き起こし、その本を目覚めさせたのがジークだとバレたのだ。この事件で化石レベルの潔癖モンスターエルフであることを自ら暴露するはめになったリユーにはそれはもう嫌われた。

非常に残念な展開になってしまったものの、悪いことばかりではない。この事件に巻き込まれてしまった「タケミカヅチ・ファミリア」に謝罪に行ったのだが、忍者の格好をした極東少女がいたのだ。とてもエッチだった。

(はっ！ しまった、こんなこと考えてる場合じゃなかった)

些細な考えでもエッチな方向に膨らませてしまうのはジークの悪い癖だ。頭を何度か叩き、アスファイから得た情報に思考を巡らせる。

敵から得られたのは『彼女』と呼ばれる存在が怪人を作り出し、エニオオ——都市の破壊者を意味する名——なる何者かの狙いは迷宮都市を滅ぼすこと。59階層へ行けば何かがわかること。この程度だ。

以前『遠征』の協力を約束したのだが、今回の『遠征』にジークは行かない。恐らくヘルメスと手を組んだロキが、取引に使える情報を与えることを拒んだのだろう。下の者の成長に繋がらない、フルチンの敵がいきなり大量に現れたらどうするつもりなんだ、と尤もらしいことを並べていたが、間違いなく建前だ。

(来るとわかっていながら目をつぶると目を閉じていれば問題な——)

「あつ、こらつ、えげつないぞ!?!」

隣でアイズに向かって抗議するヘステイアの動きに合わせ、たゆんつ、と双丘が弾んだ。それを察知したジークは、限界まで目を見開いて素晴らしい光景を記憶した。計算され尽くした恐ろしい罠にはめられ、ヘステイアの神としての一面に恐怖しながら思考を戻す。

ジークは今ある材料だけで考えた。そして『彼女』と『都市の破壊者』の正体がある程度突き止めた。

(敵が『アリア』ってしつこく言ってたからなあ……『彼女』の正体は多分『精霊』だ。どうして敵になっているかはさっぱりだが。

『都市の破壊者』は……デュオニユソスとかいうスカした面の男神の可能性が九割。ペ、ペ、ペニ……ペニ〇とかいう男性器みたいな名前の女神が一割つてところか。やばいな、神々が雑菌扱いしている神って覚えていたから、どうしてもペニ〇しか思い出せない)

前者はほぼ勘だけで判断したが、後者はしつかりとした根拠がある。

中立であり便利屋でもある「ヘルメス・ファミリア」は様々な依頼をこなす。一員であるジークも例外ではなく、苦労人のアスフィと同程度の仕事をこなしている。顔に疲れが出るのは両者の能力差を表しているのだが、それはさておき。

一月ちよつと前、ジークは儂げな町娘から『唐突に響き渡る「ヌウウウヴオオオオツ!!」という謎の雄叫びをどうにかしてほしい』という依頼を受けた。ほつと息を吐く少女が恋人らしき小人族の男と家の中に消えていくのを見送り、とんでもない業を目撃してしまった気分になりながら調査をした。

そして雄叫びが聞こえた「デュオニユソス・ファミリア」に潜入し……見てしまった。

『ダイダロス通り』の貧乏神が、意識が朦朧としているデュオニユソスの眷属を己の眷属にどんどん『改宗』しているところを。その近くでデュオニユソスがワインに映る自分に『私は正義の味方だ』『ロキ達とともに悪を討つ神』『決して犯人ではない』と囁いているところを。それらの光景を聞落ちした雰囲気纏う「白巫女」が眺めている姿を。

最初はペニ〇が下半身の象徴の名前に違わぬ寝取り大好きの救いようのない神で、デュオニユソスは『ちゅーに病』の上に寝取られ大好きの上のド変態で、神のぶっ飛んだ性癖にフィルヴィスの目が死んでいるのかと思っていた。というか記憶を封じていた。見た目も年齢も婆な神の寝取りとかどこに需要があるんだ。『ちゅーに病』だって見るに堪えない。脳も心も破壊される。

だが、今となつては話が変わる。ロキ、ヘルメス、デュオニユソスの眷属は24階層の一件で『都市の破壊者』の名前を知ったはずなのに、デュオニユソスだけは一月も前に知っていた。怪しいにも程があ

る。

しかし、証拠がない。『都市の破壊者』というのは神々の言葉だ。ディオニユスが本当に『ちゅーに病』だからその名前を口にしたと言えよそれまでだし、ペニ○だって怪しい。どちらが犯人でも今まで犯人を告発しない理由がわからない。疑っていることを感付かれて仲間には危険が及ぶことを考えると、勝手に探る訳にはいかない。

一応、色んな状況証拠からデメテルも犯人候補になったが、すぐあり得ないと取り消した。

あの女神ならこんな手間をかけない。怒ればこちらが手を打つ暇もなく息の根を止めにかかる。飢えという恐ろしい方法で都市の住民を苦しめ、少ない食料を奪うために殺し合わせて醜い本能を曝け出させて嘲笑うくらいはする。フレイヤにドツキリを仕掛けるためだけにグラサンをかけた女神に『神威』を発しながら脅され、散々こき使われたジークには確信があった。

(どっちにしる証拠が揃うまでは保留だな。ヘルメス様を送還される可能性を潰すためにも黙っておこう)

ジークは意識を切り替え、時間の流れに身を委ねながらボコボコにされるベルを眺めていた。

「アイズに嫌われる幻覚を見せたし、性欲を高めるために淫夢もたくさん見せた。明日ギルドに行つてアイズの『ランクアップ』の報告を知れば心は限界まで弱まるだろう。狙うならそこだ」

「酷いですね、弱みに付け込むなんて」

「お前が依頼してきたんだけどな。嫌ならやめるといい」

「いいえ、ベルさんは絶対私がいいます」

「部屋はこの前教えた隠れ家を使え。俺も自分が作った薬の効果を知りたい……しくじるなよ」

灰髪青年と薄鈍色の少女がこのような会話を交わしたことを知る者は誰もいない。



オラリオの南東に広がる砂漠地帯。友人である砂漠の国の王子から招集を受けて殺人的な日差しを浴びながら砂の海を進んでいたジークの視界に、不可思議なものが入った。

それは『黒い竜巻』。Lv. 8の桁外れの視力は、空を黒く染め上げながら大きくなっていく竜巻の姿を正確に捉えていた。冒険者の本能もあれがとても危険であることを伝えてくる。

「……」

場所はとても遠い。ここから『黒い竜巻』まで壊してはいけない障害はない。ならやることは決まった。

ここから『黒い竜巻』を破壊する。

「[人造、抜剣]——[ノートウング]」

ジークは旅を再開する。『黒い竜巻』が跡形もなく消滅した背後に目を向けることは一度もなかった。

数日後。

カイオス砂漠で有名だったジークの『絶体絶命のアラム王子を救った英雄』の称号が、『絶世の美男子であり名君でもあったシャルザードのアラム王子を趣味で性別を変えて二度と戻せなくしたクソ野郎』になった。

18階層

Lv. 2になって十日しか経っていない知り合いの兎のような風貌をした少年、ベルが『中層』に行ったきり戻ってこなくなった。原因はこれまた知り合いの極東少女が所属する「ファミリア」の『怪物進呈』パス・バレード。ベルの主神の神友として彼の救助に行きたいから手を貸して欲しい。

都市の外から帰ってきたヘルメスに告げられた青年はこう言った。

「久々に奮発してオプション付けたのに、代金払い終えた直後に言いに来るとか狙ってんのか？」

「まあ待て、アスファイの真似か？ その握り拳を下ろすんだ。ここは娼館なんだから流していい血は処女を散らした証だけだろう？ 俺の返り血で汚しちゃ駄目だ」

「じゃあこっちで」

「待つんだ。俺のケツの処女なら散らしていいって意味じゃない！ だからその苦惱の梨をしまってくださいお願いします！ ふおおキュリキュリツて金属音が超怖い!」

「男の象徴用の小さいのもあるけど、どっちがいい？」

「——うん、確かに俺は酷い真似をした。大人の階段を上ろうとする少年を邪魔するなんて口どころかアレを裂かれても文句は言えない……だから！ 遠慮なく俺のブツをやるといい!!」

「じゃあ女にしてから前に使ってやろう。ヘルメス様は仮にも神だから綺麗な女になるだろうし」

「ああ—————!?!」

漫才を繰り広げながら去っていく神と眷属を、美しい脚を持つアマゾネスがため息を吐いて見送っていた。

その後、バベルの最上階に君臨する美の女神から虫けらを見るような視線を送られる真似をした主神に代わり、とある依頼の恩を盾に一人の少年に執着する女神から「ファミリア」を潰さない言質を取り。

主神と大男を除けばハーレムになる臨時のパーテイでダンジョンに潜ることにテンションを上げ、カッコいいところを見せようと決意

し。

助っ人の覆面の冒険者から冷え切った視線を向けられ、調子に乗っていたことを反省して揉み手で覆面の冒険者に媚びへつらう三下ムーブをかますという醜態を晒し。

17階層に出現していた階層主『ゴライアス』をそのモンスターが産まれる凹凸一つない障壁、『嘆きの大壁』に腰から上が埋まる形で叩き付け、修復されて消えてしまうためダンジョンの壁ではなくピクリともしない『ゴライアス』の尻に『長くて太いものを突っ込んでください♡』と刻み。

これが本当の壁尻だよね、という一発芸をかまして盛大に滑り、ドン引きの表情と眼差しを向けられて盛大に落ち込み、これをやれば爆笑間違いないでリユーチャンの印象もひっくり返ると騙した神に膝を叩き込み。

18階層に展開された【ロキ・ファミリア】の野営地の一角で嚴重に監視されている男は誰でしょう？

——そう、ジーク・グレイマンです。



「なんで俺だけ監視が……」

きっかけは胸のない方のアマゾネス、ティオナの呼びかけだった。【ロキ・ファミリア】にくつついて帰るためという名目で一日18階層に留まることになったベル・クラネル救出隊が『リヴィラの街』の観光から戻った時、水浴びに行かないかと提案したのだ。

一人残らず賛成したことで、ティオナの案内に従って女性陣が森の奥へ消えた瞬間、ジークは残った【ロキ・ファミリア】の男性陣に囲まれた。ベルやヴェルフ達部外者は唐突な出来事に硬直し、囲まれたジークは動揺する様子を見せずただ身構える。

『ジークさん、女の皆の水浴びが終わるまで貴方を監視させてもらうつす』

『なんで?』

『貴方は絶対に覗きに行くと団長が言ってたからつす』

『で、従わなければ何をする気だ? 俺の弱点刺激のために一斉にズボンを下ろそうが目を閉じればいいし、全裸で過ごせばダメージはお前達の方がでかいぞ?』

『闇市場で手に入れた「ふたなり薬」? とかいう薬のレシピをオラリオにばら撒くつす。そうすれば大人しくなるってロキが教えてくれたので』

『七日目のセミより大人しくしとくわ』

人にトラウマを残して逝った初恋のエルフがとんでもない遺品まで遺していたことが判明。地上に戻ったら真っ先に処分してやることを誓って投降したジークは、物資に余裕がないと言っていたのにつの天幕に押し込まれ、周囲を一〇人以上の団員に見張られている。暇なんだろうか?

呼吸音すらも極限まで小さくしてピクリとも動かないジーク。あまりにも物音がしないせいで何度も天幕の様子を見られながら、何故ここまで警戒されなければならぬのかを考える。

(アイズやリヴェリアに舐めるような視線を向けたのが原因か……それとも【絶影】に依頼の人物に合わせるために娼館に誘ったのが……いや、精霊『アリア』について尋ねられた時、英雄アルバートがどんな種族も孕ませられる色を好みまくったヤリチンだったんじゃないかって言葉のせいな気も……どれなんだ!?)

最初の「ロキ・ファミリア」と邂逅した時の印象が九割以上を占めているのだが、当人達には許してもらっているので可能性として考えることもない。とりあえず自分の中で挙げたセリフと男達の嫉妬とということに納得し、疑問を解消する。

覗きは男の浪漫。もちろんするつもりだ。服を着ていようがスリーサイズもくびれと胸と尻の形も正確に見抜けるとはいえ、やはり直に目で見る興奮には劣る。というか最近、観察眼の精度が上がり過

ぎて道行く男の股間にぶら下がっている物体のポジションと形状と大きさまでわかるようになってしまったため、布越し視姦はやめていく。先程囲まれた時も余裕そうな表情をしていたが、割と気分が悪くなっていった。Lv.が上がりつつ強くなるほど弱くなっている気がするが、嘘だと思いたい。

逸れかかった思考を戻し、懐をまさぐる。抜かれた手にはビー玉サイズの青水晶が握られていた。対となる水晶の『映像』と『音声』を距離と障害を無視して入手できる規格外の魔道具マジックアイテムである。以前協力したデメテルからの報酬を基に、人間の体内を調べて医療に役立てたというアミッドの願いに応じて小型化、量産に着手した。

この水晶の片割れは道中で捕獲して洗脳した『バッドバット』に埋め込んである。この重要任務を達成した暁にはあのモンスターを親友として扱ってやろうと考えながら、水晶玉——『眼晶』オクルスを起動させる。

『あ、「バッドバット」』

『撃ち落とさない』

『了解』

ぱりーん、という乾いた音を最後に水晶はうんととも言わなくなつた。矢と下手人のエルフしか見えなかつた。片割れを破壊され、ン千万ヴァリス費やしたジークの持つ水晶がガラクタになつた瞬間である。

「ふっ……天才たる俺に対等な友なんて必要ない。信じられるのは自分の力だけ。ただ一人君臨する孤高こそ、俺には相応しい……別に負け惜しみじゃないし。悔しくなんてないし……!」

水晶をポイ捨てし、唐草模様の布を取り出す。透明になれる『ハデス・ヘッド』をくれないアスファイに對抗して生成した魔道具マジックアイテム『シーフ・スカーフ』。極東の大泥棒を参考にしたせいで間抜けな恰好で装備しなければ効果がないという制約があるものの、姿どころか音や匂い、魂の色さえも隠すことができる。フレイヤの入浴を何回も覗いて検証したので間違いない。

「バレなきや犯罪じゃない……罪がなければ罰は与えられないんだ

ぜ、ファイッッン!!」

ジークの覗きは神聖浴場の時と同じように成功した。催眠をかけられた団員はジークの脱走に気付かず、見張りも完璧に存在を隠したジークを見つけることはできなかった。

ただ一つ、彼に誤算があったとすれば――。

「ジーク君、君は覗きをしたかい？」

「してないです」

「ダウトオオオオオ！ 澄んだ瞳でしれつと嘘を吐くなあ！」

「死んでください派閥の恥と汚点」

「ぐあああああああああああああ!!」

人間の嘘を見抜ける神の存在である。男の浪漫には協力的な神が近くにいたせいでその特性をすっかり忘れていたジークは、主神共々団長から折檻を受けた。

帰ったら神の嘘を誤魔化せるようにしよう……そんな思考を最後に、ジークの意識は途絶えた。

後日、懲りずに温泉で覗きをしてシメられることを誰も知る由もなかった。



「お困りのようだな、小人族の少女よ」

「貴方は……グレイマン様ですか」

「ベルのことが気になってるな？」

「な、何故そのことを？」

「それはどうでもいい。俺はお前に耳寄りな情報を持ってきた」

「何です、お金を要求するつもりですか？」

「まあ聞け。ベルは俺が毎日コツコツと調教してな。押しまくれば簡単に落とせるようにしてある」

「何ですってえ!？」

「ここは温泉……悩殺のチャンスがいくらでもある」

「おおお……!!」

「野郎が女を襲えば今からくたばれこの豚が、ってなるけど、可愛い少女が男を襲うなら許しちゃう。ヘステイア様や他の邪魔者は俺が受け持とう。後は頑張れ」

「ありがとうございます！ 成功した暁には好きな食事を奢ります！」

地上に戻ったジークはハイパーウルトラジャンボ・じゃが丸くんデラックスを手に入れた。

神月祭

オラリオでは一年を通して様々な祭が開かれる。豊穰を祝う『女神祭』とこれまで亡くなっていた冒険者や英雄を悼む『挽歌祭』が『二大祭』と呼称される最も大きな催しだが、何でもかんでもお祭り騒ぎにしたがる人間の一面が垣間見えるような祭がたくさんある。

聖夜祭、怪物祭、偉業の日……今夜開かれている神月祭がそうである。月を神に見立ててモンスターの魔の手から無事を祈る、というのがこの行事の目的だが、神が君臨した今の時代ではバカ騒ぎをするための口実にしかなくなっていない。

しかし、誰も口を挟まない。神も人も騒ぐのが好きだ。財布の紐を緩めて散財し、楽しくなれたらそれでいいのである。

「——なのにどうして俺は縛り上げられて正座させられているんだろう？」

路地裏に建つうらぶれた教会の雑草が繁茂する床に荒縄でぐるぐる巻きにされたまま正座させられているジークは、大部分が崩れてなくなった天井から降り注ぐ月の光を浴びながらぼつりと呟いた。

祭は楽しいことが多いが、羽目を外して愚かな行動をする者も出てくる。その中にはジークがとてつもなく嫌いな人種がいるのだ。

毛の薄い頭部に加齢と汗で臭う体臭、フケや油で汚い肌、運動不足なことが丸わかりの太った体躯。中年のくせして無駄に高い筋力と敏捷性と性欲。できた子供に責任を持たないのに美少女を見かけると同意もなしに襲い掛かって押し倒して犯す外道。なのに神々などの一部からは熱狂的な支持を受ける、モンスターよりも駆除すべき世界の害虫。

その名は——『種付けおじさん』。

美少女の天敵であるこいつ等がジークは嫌いだ。相手の気持ちを考えてない欲望の奴隷が大嫌いだ。男と女が一緒に性欲を満たすなら互いが満たされなければならぬ。相手を苦しめ自分だけが気持ちよくなるうなんて言語道断。

外見はいいのに性格や言動が残念でモテない女達を集めて

【愛の夜宴】を開き、多くのモテモテ女子を送り出したほどの紳士ジークには『種付けおじさん』が——というか強姦とかする輩——が許せなかった。定期的に警備巡回パトロールをして美少女幸せを守っている。男は知らん、どうでもいい。

そんな訳で神月祭だろうとジークは『種付けおじさん』を見つけ次第捕獲し、カマキリやスズメバチやハエを擬人化させた女達がいる部屋にぶちこんでいた。異形の美しさと言うべきか、擬人化した昆虫は美人が多い。おまけに性欲が強いし、モンスターじゃないから『怪物趣味』とも言われない。いいことづくめだ……元が昆虫だから本当に喰われて本当に逝ったり、子供を植え付けられたりする可能性が高いがな。

「さつきも『くつ殺の館』に箱入り少女を連れ込んで勝手に使おうとしていた奴を催眠をかけた【男殺し】と一緒に閉じ込めたし……世の中のためになることばっかで、悪いことしてないと思うんだが」

そう言っただけで正座する自分を見下ろす团长を見上げる。目の下に溜まった疲れを片手でぐりぐりとほぐす彼女は、深いため息を吐きながら口を開く。

「紳士ではなく変態紳士だし、【愛の夜宴】って何ですかって話だし、相手が外道だからといって限度がありますが……後にしましょう。今、私が言いたいの是一件だけです」

深く息を吸ったアスフィは——絶叫した。

「——薬盛って女神を分裂させるとか何考えてるんですかこのアホがあ——！！！！」

「痛い痛い痛いっ?! L v. 8で評価Sのコンスト『耐久』と補正のかかる『スキル』持ちの俺になんでダメージを与えられるのアスフィ?! 暴力的なのは淑女としてどうかあああああああ頭が潰れるっ!!」「うるさいうるさいうるさい! ヘルメスもジークも私にいつつも負担をかけて! 片方が消えればこの胃の痛みやストレスも軽減さ

れる……!」

「助けてー! アスファイが追い詰められて『何も仕事しない強いだけの団長いのししを食べたら皆仲良く「ランクアップ」……』とか言い出したへイズと同じ目をしてるうー!?!」

どたばたと漫才を繰り広げる二人を他所に、ここへステイア・ファミリアの本拠ホームの教会の祭壇付近でも美しい蒼の長髪と凜とした空気を纏う女神、その女神と瓜二つなのに雰囲気は緩みに緩んでいる女神、ロリ巨乳な女神、三柱の女神に囲まれる少年を見守る鍛冶師の青年と小人族バルウムの少女による喧噪が響いていた。

「いい加減オリオンから離れる分身わたし!」

「アルテミスわたし、分身ではなく希望と呼んでおくれよ。ベルが私にくれた素敵な名前なんだ」

「白目を剥いて鼻に指を突っ込んであられもない顔をしてやろうかって脅しただろうが! あと感情も想いも共有リンクしているから、オリオンにくつつかれると嫉妬でもやもやするんだ!」

「あの子の葉はアルテミスの『恋を試してみたい』っていう本音を暴き出して、正直じゃない貴方の代わりに私を生み出ただけで、感情を共有したりする効果はないよ。だからその嫉妬はアルテミス自身が感じているのさ!」

「な、な、な……そんな訳が……!」

「僕のベル君を取り合うんじゃない! というか速攻で落とされかけているのもどうかと思うけど、どうして神造兵器『オリオン』を召喚している上に送還されてないんだ! 『神の力』アルカナムだろうそれ!」

「『貞潔を司って純潔を尊ぶ女神なら清らかな人しか使えない道具とか持ってないの? 英雄譚に出てくる聖剣エクスカリバーみたいな……男は好みを判別するエクスカリバーを皆持つてる』と言われてな。それで『オリオン』を召喚しようと思ったら……なんか、できた!」

「そんなのでできてたまるかあー!」

「貞潔と純潔の女神様の清らかな人しか使えない武器ですか……ならばベル様は使えないはずだと思いますけどねー」

「何か言ったか、リリスケ？」

「いえ、別に」

見目麗しい女神達にもみくちやにされるベルが非常に羨ましい。あつちは柔肌やいい匂いを堪能できているだろうに、こっちは途轍もない握力と頭蓋が歪むメキメキという音しか堪能できない。あと昔言った下ネタをエルピスが口にした途端に力が強まった。

（狙ってただろあの女神……前に手紙を届けに行つた正義の女神といい、どうして清純そうな女神はちらりと腹黒いところを見せて幻想をぶち壊してくるんだ……あつ、ヤバ）

変な八つ当たりを考えていたジークの頭からメキヨツ！ という鳴ってはいけない音が聞こえ、次第に痛みとともに意識が消え去っていく。

「二万年分の恋をしよう、ベル！」と笑顔で話しかけられて赤面する少年に八つ当たりしてやることを誓いながら、ジークは氣を失った。



恋を満喫したいという分身エルピスの願いを叶えるため、もしくは監視のため、ベルとエルピス、ヘステイア達が教会から出て行つた。残っているのはエルピスに協力したヘルメス、お目付け役のアスフィ、氣を失っているジーク、そしてアルテミス。

「……いいのかい、アルテミス。恋を満喫したら……ジークの薬の効果を最後まで発揮してしまえば彼女エルピスは消滅する。天界に彼女の核になつている『オリオン』が戻りかかつている以上、別れは避けられないことだが、いつ訪れるかわからないそれを見届けるために傍にいないくて大丈夫か？」

「……自分が恋にはしやぐ姿を見続けろと？ それも神友ヘステイアに見守られながら？ 黒歴史を暴露されるより酷い拷問だよ……」

「それは確かに」

煤けた背中に追い打ちをかけたくなるのが神の性だが、ヘルメスは自重した。『オリオン』を抜く恋人選定をイベントにした罰はドロツ

プキツクだったので「ありがとうございます！」で済ませられたが……これ以上からかうと矢が飛んでくる。物理法則を無視する矢は回避不可能だし、肛門括約筋に力を入れても抉って穿たれるため防御もできない。肛門に矢が不法侵入すれば天界送還待ったなしなため、頑張つて我慢する。

見えない場所で自分と同じ姿のエルピスがはしやいでいる光景を想像して悶えていたアルテミス。しかし、急に背筋を伸ばして真剣な顔になるなり、ヘルメスと視線をぶつけ合う。

「ヘルメス、私も聞きたいことがあるんだ。とても真面目なことだ」

「……わかった。嘘偽りなく答えると誓おう」

「——この子供が何故、神造兵器を持つている？」

ジークを指さすアルテミスは笑わない。ヘルメスも誤魔化しに走ろうともしない。神造兵器——神々をも殺す武器をジークが持つていると告げられたことに息を呑んだのは、アスフィー一人だけだった。「オーデインが管理する神造兵器『ノートウング』。不死者に死を、決して壊れないものには破壊を、約束された運命に波乱を齎す……理を捻じ曲げる力。私の『オリオン』とは比べ物にならないだろう」

「……」

『アンタレス』のような黒いモンスターにも通じていたということ、完全にこの子供の血肉となり、魂レベルで染まりきっているんだろうが……神々の言葉で『危機』を意味する『ノートウング』は、所有者にあらゆる危機を与えてくる」

「ヘルメス・ファミリア」では笑い話のようになっていたが、ジークは三歳で天涯孤独になっていた。手を差し伸べてくれる者は誰もおらず、自分で行動しなければ死んでいたかもしれない可能性が高く、普通の幼児が同じ状況になればほとんど死んでいただろうと誰もが考えていた。

それだけじゃない。ダンジョンに潜れば確実に『異常事態』^{イレギュラー}が発生し、週に最低一回は暗殺者に襲われ、七年前を覚えている者から邪神に似ているという理由だけで毒を盛られたりなど洒落にならない嫌がらせを受けたりもしていた。

それが全て規格外と言う他なかった『魔法』の代償と知ったアス
フィは言葉もなく、ただ全てを知っていたはずのヘルメスを見つめる
ことしかできない。

「この子に平穩は訪れない。何度生まれ変わろうと力を求めざるを得
ない人生を歩むだろう。『救界』^{マキア}のために子供の運命を弄んだなら
……ヘルメス。私は『オリオン』を使うことも辞さないぞ」

女神から嘖き出る月の光のように美しく、冷たい『神威』。それを叩
き付けられるヘルメスはしばらく目を閉じていたが、観念したように
口を開いた。

「——ジークの父親のせいです」

「は？」

「だから、ジークの父親のせいだって」

目を点にしたアルテミス。シリアスな空気が碎け散り、軽薄な態度
を取り戻したヘルメスが笑いながら暴露していく。

「そもそも『ノートウング』はオーデインが槍の稽古をしていた時に
うっかり壊してたんだよ。それを他の連中にバレたら面倒事になる
と予感したオーデインは証拠隠滅も兼ねて下界に降りたのさ」

「……あのオーデインが……うっかり？ 他人に厳しく自分に万倍厳
しくみたいなオーデインが？」

「キャラを守りたいって思いもあったんだろ。で、詳細は省くし、ジークの父親が酔っ払っていたのかヤンデレに追いかけて慌てていたのかは不明だけど、『ノートウング』を壊したと勘違いしたんだ」

「……」

「証拠隠滅のために『黒竜』の鱗で粉になるまで神造兵器を摩り下ろし
て、それを悪食だった仲間の食事に混ぜた。そして秒でバレて自分の
食事とすり替えられて、そのまま気付かずに食べたらしい」

「……」

「以上だ。ジークも父親の知り合いから聞いただけで俺も真相はわか
らない。ダサすぎるから悲しき運命に縛られた血族みたいな壮大な
話にしてくれて頼まれてたけど、嘘を言わないって誓ったからな」
「……………」

そのままアルテミスは固まってしまい、しばらくの間動かなかった。シリアスな空気にしておいて真相がしよーもなかったら誰だっ
てこうなるだろう。アスファイも同情的な視線を送っていた。

その後、ジークが危機を嘆くどころか理を捻じ曲げる力を嬉々として使い、自分の血を材料に『性転換薬』やどんな種族にも使える『妊娠薬』、『擬人化薬』を作っていると知ってアルテミスのジークへの好感度が下がった。

後日、感動的な別れをしたエルピスが何故か《ヘステイア・ナイフ》を依り代にして生きており、ベルと添い寝をしている現場を目撃したヘステイアが発狂した。

男の浪漫

神々が自主的に開くパーティである『神の宴』に参加できるのは基本的に神だけだが、主催が奇抜な発想をする神物であれば話は変わる。今回開かれる「アポロン・ファミリア」が開催する『神の宴』の参加条件は眷属一名の同伴だった。

面白いことが大好きな神々はこの条件を呑み、自慢の屈強なドワーフや美しいエルフのような選りすぐり団員を伴い、自慢するために参加した。普段は来ないような神もいる。つまり、今まで知る機会のない美女や美少女と縁を結ぶことができるという訳だ。

そんなチャンスを『貴方とヘルメス様を二人きりでそんな場所に行かせたら、絶対に問題を起こすのでダメです』と言われて取り上げられたジークは、面倒な神々と顔を合わせなければならなくなったことを嘆くアスファイにこっそり取り付けた『眼晶』^{オクルス}から『神の宴』の様子を見ていた。

ぶつちやけ、ジークに『神の宴』に行く気はなかった。男色の気をむんむんさせる神が主催という時点で行く気は消滅していたし、女を見るだけなら『眼晶』^{オクルス}で十分だ。今もヘルメスに向けられて投げられる『おつ、邪神エレボスならぬ邪心エロボスの主神ヘルメスがいるぞ』『ヘルメス、ヘルメスではないか。エレボスが好き過ぎてそっくりな子供を眷属にしたヘルメスではないか』『惚れ薬作ってくれるよう頼んでくれオナシヤス!』のようなからかいの言葉を自分が受けていれば、間違いなくやり返して問題になって、ストレスが限界になっている団長から「ちね」と言われることになっていただろう。

あつ、ベルがフレイヤに頬を撫でられてる。美の神だろうと数え切れない男と寝ている女に興味はないが、他の男がいい思いをしていると腹立つ。

だが、今は気分がいい。聞こえてくる普段なら絶対に報復案件の神々の戯言も、ただの雑音として聞き流せる。アスファイが不在の隙を狙って開錠行為^{ピッキング}で彼女の部屋に忍び込み、性能を向上させた『淫夢で快眠枕』を置いてくるついでにかっぱらってきた材料で完成したの

だ。

それはジークの十八年に及ぶ人生の集大成。積み重ねてきた技術と知識と経験が凝縮された夢の結晶。誰もが夢を見ては破れてきた男の浪漫。

「完成したぞ……『セックスしなければ出られない部屋』が！」

本当に……ほんつとうにここまで長かった。

最初は『孕むまでセックスしないと出られない部屋』を目標に製作を進めていた。しかし、猫や犬のような動物の妊娠だけならともかく、植物の受粉も部屋を出る条件を満たしていると判断され、魚の受精までカウントされた。

検証のために「デメテル・ファミリア」の農業や「ニョルズ・ファミリア」の漁業を手伝っていたのだが、冒険者をやめてうちで働かないかと勧誘されるほど腕が上がるまで従事することになった。

ニョルズの方はいいことがなかった。汗も男も魚も臭いし、「ニョルズ・ファミリア」の活動地点である港街^{メルン}では昔『テルスキュラ』でメツタメタにして惚れられた肉食アマゾネス達に性的に襲われたし、『あのアマゾネス達が探してるアツシユとかいう奴はお前だろ！』とキレ散らかす「ロキ・ファミリア」にも襲撃を受けた。

小人族の勇者と愛に燃えるアマゾネスが部屋から出てくる姿を見せつけられた後、ジークが掃除をする羽目になったこともある。完成間近の人の物をなに勝手に使ってやがるんだアイツ等、と思う以上に、本当にお金あげるから尊厳がズタボロになるまで凌辱されてくれないかな、と考えた。

そして終いには子供達が勝手に入り込み、泣く泣く『魔法』で『孕むまでセックスしないと出られない部屋』を壊すことになった。感謝されるどころか何やってんだコイツ、という汚物を見る目を向けられた拳句、材料などの関係で『孕むまでセックスしないと出られない部屋』は作成不可能になった。数億ヴァリスがパアになった瞬間である。知る人ぞ知る一見さんお断りの老舗のような『くっ殺の館』とは違い、ついうっかり男女が入ってしまうような場所に建てなければならぬコンセプトが仇になった。

だから劣化版であり、後継でもある『セックスしないと出られない部屋』は慎重に作った。嫌がらせにヒキガエルの化物か野郎同士を閉じ込めてケツを仲良く掘り合わせようと考えていたが、後始末をジーク自身がしなければならなかったため、自分と異性、もしくは許可を出した異性同士しか入れないよう制限を真っ先にかけた。

他にも自分の『魔法』以外では力尽くで脱出されないように『オリハルコン』や『オブシディアン・ソルジャーの体石』をふんだんに使い、耐久値も上げた。おかげで第一級冒険者でもなければ開けないほど扉が重くなった。

最後にスリルを味わったり楽しむための薬と小道具、『淫夢で快眠枕』と『入ると発情寝台^{ベッド}』を設置して準備完了である。

「いやあ、大変だった。一度壊した時は本当に諦めそうになったし、辛いこともいっぱいあった。なのに完成した今はいい思い出しが浮かんでこない……」

いい思い出というのは「デメテル・ファミリア」のことである。ニョルズと違ってデメテルは優しい女神だし、彼女の眷属は美少女が多かった。一緒に仕事ができ、おまけに手料理も食える。男が夢見る楽園があそこにあった。

だがしかし、何よりも喜ばしいのは……彼女達を守れて、彼女達の命を奪おうとしていた悲しきエルフの少女の手をこれ以上汚させずに済んだことだろう。

「股ぐらの汚いブツを見て気絶していたから取るに足らない雑魚だと油断していただろ？ 洗いざらい話してもらおうぞ、仮面の怪^{クリーチャー}人エイン……ファイルヴィス・シヤリア」

賑やかで平和な光景を伝えてくる水晶玉を握り潰し、ジークは捕らえた『エニユオ』の唯一であり最強の手駒と対峙した。



「お帰りヘルメス様。『セックスしないと出られない部屋』を作ってた
ら『エニユオ』の正体がわかったから明日時間を空けておいて」
「ちよつと何を言ってるのかわからないかなー」

黒幕の正体

「マジか……」

アポロン主催の『神の宴』の翌日。自慢の眷属アイズとロリ巨乳ヘスティアの眷属ベルの仲を取り持つような真似をしたヘルメスに呼び出されたロキは、指定された場所の『くつ殺の館』に赴くまで抱いていたマジで天界に送還してやろうかという考えを霧散させていた。

「ロキ、先に言っておくよ。俺の眷属は『開錠薬ステイタス・シーフ』を使ったただけだ。断じて催眠魔法や脅迫による『更新薬ステイタス・スニッチ』の強制使用、神の子供の嘘を見抜く力対策の魔道具マジックアイテムによる虚偽申告は一切していない」

「……そんなもんわかるわ」

ヘルメスに返事をする声は無機質だった。怒りや驚愕、己への不甲斐なさが混ざり合い、胸の中の感情を整理することに意識を裂かれていたからだ。それはきつと、隣で表情を消している男神も同じだろう。

変態ジークの仕事道具が取り払われた石部屋には一つだけ椅子があり、そこにはエルフの少女が目を閉じて座っていた。彼女の名はアウラ・モーリエル。『ディオニュソス・ファミリア』の副団長である。

同盟を組む際に一通り『ディオニュソス・ファミリア』の構成員を調べたロキは彼女のことを知っていた。ディオニュソスの忠実な眷属である彼女の背に刻まれる『恩恵』は当然ディオニュソスのものはずなのに――。

「ペニアか、これは」

「そうだ……本神ほんにんからも確認を取った。刻んだ記憶など欠片もなかったよ」

眠る少女の背中にあるのは清貧を司る女神の『恩恵』。神々の間で悪い意味で有名な貧乏神が眷属を得たという話は聞いたことがない。ましてや他派閥の眷属を無理矢理奪うなど、どこぞの美神チートでもなければ不可能だ。

アウラ自身が『改宗コンバージョン』を願った、ディオニュソスとペニアの間に何らかの取引があつて『改宗コンバージョン』させたことを内緒にしてた……検討

すること自体が馬鹿馬鹿しい可能性が浮かんでは消える。答えなんて最初からわかっている。

『エニユオ』の正体はディオニユスか」

ある程度ロキはディオニユスを疑っていた。しかし、その疑惑は決定的なものとは言えず、ディオニユスの語る神意はロキの目にも本物として映っていた。こうして決定的な証拠を見るまで天界きつてのトリックスターが欺かれていた。

その覆らない事実にはプライドは傷ついたし怒りはあるが、それを抑えて何故お前の子供は神々ジークより早く黒幕エニユオに辿り着けたのかと視線でヘルメスに問い掛ける。

「……ディオニユスはペニアの他にデメテルを『エニユオ』の身代わりにするつもりだった。奴の計画ではデメテルは俺達の注意を逸らす囮として最高だったらしいからな」

「ふーん……それで？」

「デメテルを操り人形にするために、奴はつい先日、彼女の眷属を大量に誘拐しようとしたんだ。消耗品の人質は多くても困らないと思っただらう」

「屑やな……」

「実行者は奴の唯一の手駒である仮面エの怪人……フィルヴィス・シヤリアだ。それを偶然ペルセフォネ達と一緒にいたジークが逆に捕獲した。希釈しないと腹上死するくらい効果の高い媚薬の原液を使っただけでLv. 8並の「ステイタス」だったそうだけど、空気に触れるだけで絶頂しまくってたから楽だったって」

「……？」

ロキは自分の耳がおかしくなったのではないかと思った。都市崩壊の計画を事前に阻止したにしてはふざけているような内容が聞こえた。胡乱げな眼差しになったロキを無視してヘルメスは話を続ける。

「怪人クリーチャーの生命力のおかげで気絶で済んだフィルヴィスちゃんをジークは『セックスしないと出られない部屋』に連れ込んだ……レフィーヤちゃん同伴で。ジーク曰く、『好感度測定器ラブスカウター』でフィルヴィスのレ

フイーヤに対する好感度を調べたらマジでヤバい。性的に襲いそうなくらい高かった。このままだと百合を超えてアレが生えて——ふたなりエルフ——うっ、頭が……』だそうだ」

「おい待てやコラ」

ロキを無視してヘルメスは舌を回す。

「で、レフイーヤちゃんに依存したフィルヴィスちゃんを取り込むために『賢者の石』と『ナンニデーモ菊』を使って怪人化した身体を治療したんだって。おかげで『エニユオ』の正体とか神を酔わせる『神酒』とか『人造迷宮』の『鍵』とか都市を滅ぼすための『精霊の六円環』とか『ニーズホッグ』とかについて教えてもらって——」

「ようしいっぺん黙れ」

「ぐふう!?!」

決して目を合わせようとせず話し続けたヘルメスの鳩尾にロキの右拳が突き刺さる。その細腕にどんな力があるのか、腰の入ったいい一撃を喰らって崩れ落ちそうになる男神の胸倉を掴んで持ち上げる。

「卑猥な部分については後で本人に問い詰めちやる！ でもええ加減突っ込ませえや！ 『賢者の石』と『ナンニデーモ菊』とかいう馬鹿丸出しの名前のブツは何や？ 神を酔わせる『神酒』は？ 『人造迷宮』と『鍵』とやらは？ 一から全部説明せえ！」

「お、俺もよく知らないんだ。眷属を守ったお礼にデメテルが本物の『賢者の石』のレシピをくれたってことくらいしか。他のは全く知らない！」

——デメテルがとある『愚者』を『賢者の石』のレシピくれなきや畑の肥料にしちゃうぞ』と脅して手に入れたものをそのままジークに渡したのだが、そのことは誰も知らない。ついでに『賢者の石』の材料採取のために『オリンピア』へ行き、不器用過ぎた英雄の憎悪を『それ、俺に関係ある？』と切り捨てた拳句、『せくすいーであだるちーな美女に生まれ変わって出直せ』というセリフと一緒にぶちのめして『賢者の石』の被検体にしたことは『オリンピア』の住人以外知らない。「もうええ、じゃあディオニユソスの糞野郎は何処におる!?! 流石に

それくらいは把握しとるやる！」

「そ、それなら奥の部屋に——」

ヘルメスを放り出して目的の扉まで進む。ヘルメスの潰れたカエルのような呻き声を耳にしながら開いた扉の先でロキが目にしたのは——。



「——首輪とリードで犬小屋に繋がれて上半身を亀甲縛りにされて、『アハハ、犬のウンコ』ってアメリカ人に笑う、頭がパツパラパーになったディオニュソスやった……」

「……」

【ロキ・ファミリア】の本拠^{ホーム}、『黄昏の館』にあるフィンの執務室で語られた内容に【ロキ・ファミリア】の三首領は絶句していた。行儀悪く机に尻を乗せているロキには彼等の気持ちが痛いほど理解できた。もう黒幕が捕まっついて、更に無残なことになっていると知れば誰だってこうなる。神だってそうなる。

「ついでに結構怪我しとったんやけど……なんでもナンパした時にディオニュソスくらい爽やかでカッコよくなつてから出直せと言われたことがあつたらしい。それにディオニュソスの眷属は可愛い子が多かったやろ？ その鬱憤を晴らすためにボコつたそうや」

「……ロキ。これを知ったのはいつだい？」

「ドチビとアポロンの『戦争遊戯』が始まる前」

「もう全部ジークに任せたら解決するよね？ 僕は帰らせてもらおう」

「正気に戻れ、フィン。既にここが帰るべき場所じゃ」

疲れ切った笑みを浮かべて部屋から出て行くこうとするフィンの頭を叩いてガレスが止める。ちなみに『戦争遊戯』は「ヘステイア・ファミリア」の勝利で終わり、一ヶ月でL.V. 3になったルーキーの知らせが都市を賑わせている。

「何故これほど重要なことを黙っていた？」

「『教えたら忙しくなって娼館に行く暇もなくなるし、戦争遊戯ウォーゲームもなくなつて『リトル・ルーキー』がホモに凌辱されるかもしれない機会チャンスをみすみす逃すことになるから』……がジークの言い分や」

「ほう。奴は何処にいる？」

「夜になつたら娼館に行くらしいで。今の内に行つとかんと娼館が消滅しそうとかなんとか」

リヴェリアの姿が消えた。第一級冒険者でも見逃してしまう速さだった。最近リヴェリアの「ステイタス」の伸びやバいもんな……と、ロキは遠い目をした。

「……あー、とにかく近い内に『人造迷宮クノッソス』に攻め込むから準備しといてくれ」

「わかつた。ところでジークも参加するのかい？」

「参加せんつて。なんでも誘つてるとしか思えない恰好の赤髪の怪人クリーチャーがジークのトラウマを刺激する薬を使つとるらしい」

何故か名前も知らないエルフが脳裏に浮かび、フィンにサムズアツプしてきた。頭を振つて追い出す。

「代わりに『人造迷宮クノッソス』を難攻不落たらしめている最硬金属の『扉』の『鍵』と、『不治』の呪道具カースウエボンの解呪薬を量産しまくつとる。『鍵』は一つ製作するのに普通なら十日以上かかるみたいやけど、もう五個はできとつた」

「……」

「ちなみにジーク一人なら『鍵』も解呪薬も必要ないらしい。扉は『賢者の石』を完成させたことが偉業と認められてLv. 9になつた『ステイタス』による力技で、呪道具カースウエボンについてはそもそも『呪詛カース』が効かんのやつて」

「代替案を出せとるなら助かるが……肝心な時に役立たずになるのう、あ奴は」

フィンもガレスもLv. 9という単語に突っ込まなかつた。どちらも情報量の多さに『遠征』を行った時以上に消耗していた。どうかフィンに至つては現実逃避を始めていた。

そうこうしている間に時間は過ぎていき、『明日の僕達が頑張つて

くれる』というヤケクソ気味の結論を出して解散となった。

『異端児』

悪の温床であり苗床、闇派閥イヴァイルスの残党が潜むにはこれ以上ない堅牢さを誇っていた『人造迷宮』の攻略は一発で成功した。

本来なら人造迷宮はダンジョン以上に生存が絶望的な魔境だ。正しい道など一つもわからず、進路は最硬金属の『扉』によって強制されるか遮られる。敵は自爆を前提にした死兵、『呪詛』や異常魔法を使ってくる暗殺者集団、呪道具を装備したLv. 7を超える赤髪の怪人。そこにモンスターや悪辣な罟が加わるのだから、誘い込まれればじわじわと追い詰められて朽ちるのがオチだった。

だがしかし！ 敵にとつて不幸極まりなかったのは五年前にオウリオにやつて来た天才が正義側に立っており、その天才が『かわいそうなのは抜けない』とのたまう変態紳士だったことである。女性にガチで酷い胸糞悪い真似をして性欲を満たす輩をこの男は絶対に許さないのだ。

最硬金属の『扉』には『鍵』を作る。呪道具対策の薬を量産する。情報伝達に優れた『眼晶』のように有用な数々の魔道具を用意し、敵の戦術や戦法を知り尽くし、正確な「ステイタス」が判明しているなら「ロキ・ファミリア」の首領にはいくらでも手が打てた。

人造迷宮の道筋も天才は解決した。何をしたのかというと、こつそり侵入して『設計図』を奪ったのである。神聖浴場の彫刻に覗きのための『眼晶』を仕込んだ男にとつて、悪魔の彫刻に紛れ込ませた監視装置など丸分かりであり、欺くことは兎戯に等しい。闇派閥も透明化の魔道具を被り、床を削って指が入る程度の隙間を作り、指の力だけで『扉』をこつそり持ち上げて忍び込む怪物がいるなど想像できるはずがなく、侵入を許してしまった。

憐れなのは『設計図』を所持していた男、ディックス・ペルディクスである。神に近い天才の勘によって即座に補足され『設計図』を奪われた彼はその命を奪われる直前になって、自分が見ていた『設計図』——『ダイダロスの手記』が催眠魔法によって偽られた太陽神の肖像画だと気付いたのだ。ディックスを仕留めたベートが見たのは、

下衆な行いをしてきた敵であっても思わず同情してしまうほど恥辱と苦悶に満ちた死に顔だったという。

他にも闇派閥幹部のヴァレッタ・グレーデが遺した「てめーだけは凌辱してやる!!」という遺言に「最適な部屋があるから案内しようか、フィン？」身に染みるほど知ってるよ。絶対に忘れないからね」と論じる二人がいたり、怪人レヴィスとの戦いの決め手が女性器の上から生えたせいで裂けやすくなっていった男性器を真つ二つにしたことによる未知の激痛で失神だったり、『精霊の分身』にも立派なブツが生えていたせいで天才が再び役立たずになったりした。

後処理も大変だった。切り札として持たせていたとある『キノコの孢子』をフィンが吸ってキノコに異常な敵対心を抱くようになって、ベートが死者に鞭打つような発言をして「ロキ・ファミリア」の空気が険悪になったり、天才のようにふたなりがトラウマになる者が続出した。

それでも間違いなく最上の結果を得られた。全てが終わった時、関わった者達の胸に浮かんだ人物は共通していた。もし彼がいなければ黒幕の計画はこれほど迅速に阻止できていない。これだけの犠牲者で人造迷宮は攻略できていない。この程度の悲劇で済んでいない。才能の権化。下界の『可能性』の体現者。最も黒き終末に近き者。

その名は――

「――ジーク・グレイマン。君に話がある」

「ぎゃあああ!? フード被った骨だけのおぼけ!? もしかしなくても人造迷宮からパクった魔道具に取り憑いていた悪霊かクソツタレ!

悪霊退散悪霊退散! 南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏!」

「あつ、こらつ、極東の除霊術をするな! 塩を撒くのをやめろ! お札を投げつけるのも待て! 私はウラノスの遣いだ、幽霊や怨霊の類ではない!」

「……どつちにしろ俺にとっては似たようなものだろうが! 絶対に

『くつ殺の館』とか着服した闇派閥の魔道具イヴァイルス マジックアイテムについて何か言いに来たんだろう！ 人造迷宮攻略クノッソスや『都市の破壊者』エニユオ捕縛に多大な貢献したんだから見逃せよちくしょー！」

「悪いことをしているという自覚はあるんだな……って違う。要件は君が人造迷宮クノッソスから密かに運び出して保護しているモンスター達についてだ」

「なんだと？ 雄は殺そうが持つていこうがどうでもいいけど、女の子達に手を出すならデメテル様の畑の肥料にすんぞこの骸骨！」

「そのモンスターの仲間達が君に礼をしたいそうさ。特にエルフに劣らぬ美貌を持つ半人半鳥ハービイや歌人鳥セイレーンが強く望んでいたぞ。彼等の『隠れ里』に案内するついでに君が保護している者達も運搬すれば好感度は跳ね上がることに間違いなしだろうが……嫌なら断つてくれても構わない」

「行くに決まってるだろ案内しろ！」



人造迷宮攻略クノッソス作戦に参加したり、男に手を出されて怒髪天を突いたフレイヤに襲撃された「イシユタル・ファミリア」から仲のいい女の子達を救助したり、何故かガネーシヤが『キノコの孢子』を吸っていたけどいつも通りの奇天烈さだったせいで全然気付けなかった騒動が発生して数日後。醜態を晒させることに飽きたら犬の糞でも食わせて送還してやろうと考えていたディオニユスが回収いなくなつたされた『くつ殺の館』で過ごしていたジークの所に、全身を黒衣で包んだ謎の人物が現れた。

布の上からでも骨しかないとわかってしまったジークは、人間でもモンスターでもない存在に思わず取り乱してしまっても、『ウラノスの遣い』という言葉に反応して動揺する心を鎮めた。別にその肩書きに怯えた訳ではない。こいつの口から嘘を話させれば今までやってきた黒いことはバレないんじゃない？ と思いつき、催眠をかけてやろうと窺い始めたからである。

しかし、ウラノスの遣い——フェルズの話聞いてみたところ、後ろめたいことを追及したり、罰を与えに来た訳ではないと判明。目的はジークが保護しているモンスター、通称『異端児』の保護であるという。

『異端児』はジークが人造迷宮で見つけた異端の怪物だ。人間と同じ理知を宿し、牙や爪ではなく言葉で人と接しようとするモンスター。——何より人に近いモンスターは可愛い子や美人な子が多い！

見た目が良くて最低限の人格があるならモンスターであろうと関係ない。ジークは檻から『異端児』達を解放し、誰にも話さず隠れ家で世話をした。可愛い系や美人系の『異端児』は手ずから治療を施し、温かい食事を用意し、汚れなどを丁寧に洗った。それ以外の『異端児』は『賢者の石』の制作過程でできた万能薬以上の回復効果のある水で湯を張った風呂に蹴り落として、適当な高級店の食事と寝具を用意した部屋に押し込んだ。どっちが手厚く面倒を見られているのかわからなくなる対応だった。

閑話休題。

今まで『異端児』の案件にジークを関わらせないことをヘルメスと約束していたウラノス達だったが、本人がこうも関与してしまえばそんなことを言っていられなくなり、ヘルメスに無断でフェルズと接触させ、他の『異端児』にも会わせた。

その結果——。

「俺もうここに住むわ」

「どうしてその結論に至った」

ダンジョン20階層。『異端児』の住処である未開拓領域で真顔で呟いたジークに、フェルズの思わずといったツツコミが炸裂する。現在ジークは歌人鳥に膝枕をさせ、半人半鳥の羽を布団代わりに、半人半蛇を抱き枕にした性欲に正直な馬鹿のような状態になっていた。

「どうもこうもあるか！ 世界ってやつを四回は救っているのに、俺は全くと言っていいほどモテない！ 地上じゃ大金払わないと娼婦でもやってくれないサービスを、この子達は進んでやってくれるんだ

ぞ？ それも嫌々ではなく嬉々としてだ！」

「……まあ、彼等が君に好意を抱くのは当然のような気もするが」

直視に堪えない恰好で情けない発言をするジークから視線を外したフェルズが見るのは、離れた場所で大はしやぎしている『異端児』達である。

「すっげー、人間ってこんなに喋りやすいのか！ うわっ、尻尾がないと違和感がすげえ！」

「足、足だよ、皆！ 水の中でしか暮らせなかった私が地面を歩けるなんて……夢みたい」

「ア……ア、アー。クチ、アル。……ハナシ、デキル！」

「触っても傷が付かねえ！ いいなあ、爪がない手って！」

「ふんっ、くだらん！ 所詮は制限時間のある薬によるまやかしだ。一時の夢に過ぎん！」

「そういうグロスだって興奮してるだろ！ 片言じゃなくなったし、触れ合えば命の温もりや鼓動を感じられる身体になって、何より髪の毛フサフサのハゲ脱却だ！ しかもお前の見た目は男の娘ってやつ！」

「貴様等も元は髪などなかっただろうがああああ!!」

そこにいたのは人類の潜在的恐怖と嫌悪を呼び起こす異形の怪物の群れではなく、既存の亜人達とも異なる特徴が所々にあるだけの人間達だった。

『擬人化薬』。これの存在を知った日から、ウラノス達は『異端児』と人類の共存も夢物語ではないと直感した。今日まで現物は手に入られなかったが、使った結果は見ての通りだ。

薬はその効果を遺憾なく発揮し、雄であれば凛々しい男性に、雌であれば見目麗しい女性に変化させた。ついでに雄が使った時は盛大な舌を弾く音が、雌が使った時は口笛の音が響いた。

ジークに『異端児』が好意を抱くのも当然だろう。人類や地上に強烈な憧れを持つ彼等にとって、太陽の下で生きられる人間すがたになれる手段を齎してくれたジークは希望そのものだ。初対面時の『助けを求めらる女の子の手や涙から怪物だからって理由で目を背けるなんて俺は

絶対にしない。野郎は死ぬ』というセリフも愛嬌として捉えられている。

「——真面目な話をしよう、ジーク・グレイマン」

喜びと幸福で満たされた空気を一掃するかのように放たれたフェルズの言葉は恐ろしいほど冷淡だった。場は一気に静まり返り、ジークも立ち上がってフェルズと相対する。

「ウラノスは君に可能性を見ている。私もそうだ。人類と怪物の共存……言葉と理性で対話を望みながらも、『怪物』という負の烙印を押されている『異端児』の存在意義を証明してもらえないか」と

「……」

「他力本願なのは理解している。だが、私達には手段も方法もない。君だけなのだ、彼等の夢が叶うかもしれないと期待させてくれたのは」

「……」

「だから頼む——我々を助けてほしい」

元『賢者』の鳴れの果てである『愚者』はこの取引が成立する可能性を限りなく低く見積もっていた。卑下もせず、希望的観測もなく、それはただの事実である。

第一にジークに利益がない。製法を聞いたところ、『擬人化薬』は万能薬など比ではない貴重な素材と莫大な資金がかかっている。金ならまだしも、材料に関してはフェルズであつても安易に用意するのは口にできない代物だった。

対するデメリットは山のようにある。『異端児』への加担が露呈すれば待つているのは破滅だ。疎外と排斥だ。人類の敵である怪物以上の嫌悪や非難を向けられるだろう。『人類の敵』の名はあらゆる糾弾をぶつける恰好の的となり、彼から富や名声、居場所を奪うことを許す免罪符となってしまう。

それでも望まずにはいられない。頭はキレる、力はある、魔道具作成者の才覚も己以上。『異端児』の協力者としてこれ以上ない逸材。

『異端児』がいる場所で話を切り出したのも、情に訴えようという姑息

で卑怯な考えに基づいた行動だ。誠心誠意頼むつもりなら、本当は二人きりになつて『逃げ道』を用意すべきだ。罪悪感を抱かないように、期待を裏切られた『異端児』が浮かべる悲痛な顔を見せないようにしなければならぬはずだ。

きつとそのことに目の前の男は気付いている。だからこれは『賭け』だ。破滅の路を確実に断つという選択をしたジークに殺される『覚悟』を決めたフェルズは、ただ頭を下げてその時を待つ。

「助けるから『諦観』を滲ませるのをやめろ。腹立つ」

「……………えっ?」

間拔けな声が黒衣から漏れた。見守っていた『異端児』達も目を点にした。判断が早すぎるといふか、もうちよつとこう、時間をかけて葛藤した末に迷いを見せながら答えを出してほしいというか……。

骨だから黒衣の中でも表情に変化などないのに勘で微妙な気持ちになったのを察したのか、ジークはフェルズを睨みつける。

「助けるつつつてんだろ。雄の連中は可愛い子達のついでだがな。文句あんのか? それとも耳がないのか?」

「いや、骨だから耳はないが聴覚は生きている……まだ、信じられないだけだ。言ってしまうと、断られると思っていた」

「チツ……なら『制約』を課そう。条件は『異端児』の夢を叶える協力……地上に出ても殺されない手段の確立と提供、恒常的な効果のある『擬人化薬』の作成でいいか?」

「あ、ああ……」

「『輝く誓い、黄金の約束、結ばれし約定の環は決して破れず』——『ライン・リング』」

超短文詠唱の『制約魔法』が完成し、心よりも更に深いところを縛られるような感覚を味わいながら、フェルズが正気を取り戻したのは『擬人化薬』を与えられた時以上に興奮と喜びを露わにする『異端児』達に見送られながらジークが帰ろうとする頃であった。

——後に「どれだけ衝撃的だったんだよ。骨だから衝撃に弱いのか?」といじられ続けることを、フェルズはまだ知らない。



「ヘルメス様ッ!!」

「おおうつ、どうしたアスファイ? そんなに慌てて」

迷宮都市を囲む巨大市壁の上から遠くの平原で練り広げられるオラリオ連合対ラキア王国の一方的な戦いを眺めていたヘルメスの下に、盛大に息を乱したアスファイが訪れていた。汗を垂れ流す彼女は「ジ、ジ、ジークがッ、ジークの阿呆がついに……!」と言いながら、震える手で手紙をヘルメスに渡す。

「アイツ伝言とか置手紙大好きだよなあ。【ダインスレイヴ黒妖の魔剣】程ではないけど厨二病だよね……えーと、なにになに」

クシヤクシヤになった羊皮紙を開いたヘルメスは無駄に綺麗で達筆なジークの文字に素早く視線を走らせる。

『ヘルメス様へ』

よくも「ゼノス異端児」とかいうチョロ可愛い女の子の存在を俺に教えず隠し続けてくれたな。この恨みは忘れない。

あと恒常的な「擬人化薬」の材料で一番重要な「黒竜の生き血」が大量に必要なったから「黒竜」の捕獲に行ってくる。北の地域で人が寄り付かない場所にある鱗から超微量の血を集めるのもうしんどいし。

もし負けて世界が減びることになった時のために先に書いておく。
メンゴ!

P・S おやつは三〇〇ヴァリスって誰が決めたの?

ジーク・グレイマン』

「……………は?」

優男の笑みを完全に消し去ったヘルメスの手中で、グシヤリと音を立てて羊皮紙が握り潰された。

Hero

どうでもいい戦いとは違う、これからの未来を決める勝負で初めて負けた。

恐怖を味わった。絶望を味わった。これ以上ないほど、言い訳の仕様のない敗北だった。

育ての親のふたなりエルフの時と異なり、こうして逃げ出せたのは奴にジークを捕まえようという意志がなかったからだ。そんなことをする必要がないと心から理解していたからだ。その事実を嫌というほど思い知っていた。

「グレイマン灰男」……？ おい、貴様は何故都市の外に出ている。都市から出るための手続きがされたという報告は上から来ていな——つ。なんだ、その顔は!？」

都市の門兵をしているギルド職員と「ガネーシャ・ファミリア」の団員が何かを言おうと近付くが、ジークの顔を見るなり驚愕や動揺の声を漏らして引き下がった。彼が門を潜って都市に入っても誰一人近寄ろうとしない。

「ジーク！ 帰ってきたんだな、よかった……!?! なんだ、そのやつれた顔……まさか!？」

誰かから報告を受けたのか、血相を変えたヘルメスとお供のアスファイが駆け寄ってきた。ふらふらと歩き続けていたジークは二人の前で膝を折る。

「ヘルメス、様……すまない」

「謝るな、必要なこと以外喋るんじゃない! 『黒竜』はどうなった? 勝って帰還したのか? 負けて逃げ出したのか? お前の口からハッキリ聞かせろ。世界の命運が懸かっているんだ!」

ヘルメスの腕の中で精魂尽き果て、深い眠りに落ちそうになる意識を必死に繋ぎ留めながら、ジークは言葉を紡いだ。

「デキ婚しそうなんで助けてください」

「……………どうしてやつれていて、何故服が乱れているのか簡潔に説明しろ」

「腹上死寸前まで逆レイプされた」

「アスファイ、殺れ」

「了解です」

◆◆

バベル三十階。三ヶ月に一度開かれる『神会』デナトウスの会場である階フロアを丸ごと使った大広間は今、一人の男の処刑場に様変わりしていた。

契約を違えたウラノスからヘルメスが強引に使用権を奪ったこの会場にいるのは「ロキ・ファミリア」の幹部陣、ヘルメスとアスファイ、『リバース・ヴェール』を使ってジークの救出を試みるも第一級冒険者達に秒でバレて「ウラノスの遣いだ」と速攻で切り札を使ったカツコ悪いフェルズ、床の上で猿轡を噛まされた上に鎖で縛られて転がされているジークだ。

今のジークは逃亡防止のために『恩恵』を封印されていた。猿轡は言い訳も弁明も許さないという意志の表れであり、それだけヘルメスも苛立っているということである。アスファイが何も言わずに付き従っているのがいい証拠だ。「助ける『賢者』！」「今の私は『愚者』だから無理」と視線で意思疎通しているフェルズが何をしても阻止できるように身構えている。

「ヘルメス、なんでウチらをこんなところに呼び出した？ 自分が『俺の眷属が「黒竜」の捕獲とか馬鹿な真似をしに向かった！ 連れ戻すのに協力してくれ！』って相談してきたから、ウチの眷属眷属達は借りを返すって遺書まで書いて準備しとったんやぞ？ ドッキリ大成功、とかほざいたら許さんで」

『擬人化薬』、強いモンスターはイケメンや美少女になるのがテンプレ、ジークを拘束できたのは腹上死寸前まで衰弱していたから、ジークは攻めの女の子に弱い、デキ婚。後は察してくれ」

「なるほどなあ。『黒竜』に『擬人化薬』を使ったら超絶美少女になって、竜の本能とかで自分より強い相手と番になって子供作るみたいなオチになったんやろ？」

「舌戦や『催眠魔法』で丸め込まれるのを防ぐために喋られないようにしたから本人の口からは聞いていない。だが、多分そうだろう」
「殺してええか？」

天界きつてのトリックスターと呼ばれていた頃の顔で殺意を剥き出しにするロキ。愛しい眷属達の『覚悟』を無為にされた彼女がキレるのは当然の話だった。『覚悟』をコケにされた第一級冒険者達も静かに怒りを撒き散らしている。特にハイエルフは汚物を見るような目を向け、金髪の剣士は瞳孔が開いたとんでもなく怖い顔になっていた。

『黒竜』の討伐は絶対だ。ジーク……お前は性欲にだらしがない糞野郎だけど、気に入った女の子は世界を敵に回そうが守ろうとするだろう。世界にはお前まで相手をする余裕はない……だから、ここで始末する。外道と罵られようとな」

どちらにしろ『黒竜』に欲情したという情報が広まれば、『怪物趣味』と下界最上級の蔑称で呼ばれることになる。そうなれば待っているのは生き地獄だ。殺すと言っても「ロキ・ファミリア」が誰も止めようとしなことがジークの未来がどれだけ悲惨なのかを示している。なら歴史に名前が残せるようにカツコよく死なせてやろう。それがヘルメスの与えられる慈悲だった。

せめて遺言くらいは聞いてやろうと猿轡を外す。芋虫のようにもぞもぞとしていたジークは開口一番、こう言った。

『黒竜』は孕ませてねえよつ、勝手に決め付けるな！俺にも最低限の分別くらいあるわ！」

「……」

神二人は目を見開く。ジークの発言には嘘がなかった。

(おい、どういうことや?)

(待って待って! 俺、ちゃんと『黒竜』はどうなったって聞いたよ。

そしたら『デキ婚しそう』とか『逆レイプされた』とか言ったんだ!)

(相手が『黒竜』ってハッキリ口にしたか?)

(……してない)

「ジーク、全部話せ。自分の判断で必要ないと決めて話さんとかはなし。本当に全部や」

「俺は悪くなくない? ねえ、俺は悪くないよね!」と後ろで喚き散らす男神を無視して、殺意を消したロキが真実を語るよう促す。「ロキ・ファミリア」の第一級冒険者達も、フェルズも、顔色の悪いアスフィも黙ってジークを見つめる。

自分は悪いことしていないみたいな感じで傍観しやがってこの骨が、とフェルズを一瞬睨みつけ、ジークは何があつたのかを語り始めた。

——まずは『黒竜』について。

神時代が始まって千年、最強と呼ばれていた【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】の二大派閥が総力を挙げてでも勝機が見えるどころか敗走するしかなかった怪物の王が『黒竜』だ。Lv. 9のヘラの眷属と、彼女より強かったLv. 8のゼウスの眷属が一方的に敗れていることから、『黒竜』の力を【ステイタス】で表すなら最低でもLv. 10を容易く超えるだろう。そんな化物相手に『討伐』ではなく『捕獲』を選択するなど、妄言以外のなんでもない。

だが、ジークには『切り札』を使えば不可能ではないという自信があつた。

【ノートウング】。自動回復、精神力回復、全属性超高耐性、絶断属性、不壊属性、遠隔攻撃、【ステイタス】倍化、e t c ……ヘルメス曰く『ぼくがかんがえたさいきょうのまほう』であり、語るのも馬鹿らしくなる効果を発揮する剣を召喚する『魔法』^{チャート}である。

更にジークは念を入れて感情や欲望の高ぶりで能力値アビリティに補正がかかる『スキル』の力が最大限発揮できるように調コンディション子を整えた。……単に自慰行為を控えて欲求不満でイライラムラムラしていただけだが。

トドメに材料の関係で一本しかなかった恒常的な『擬人化薬』を使うことで弱体化した『黒竜』の捕獲は無事成功したのである――。

「で、問題はこれからつちゆう訳か。何があった？ 『黒竜』が人になった姿がフレイヤに勝るくらいに別嬪で、越えたらあかん一線を越えたんか？」

「……何か勘違いしてないか？」

「あん？」

『擬人化薬』はあくまであらゆる生物を人に近い構造にするだけの薬。犬や猫に飲ませても知性や理性を獲得したりしない。モンスターも同じだ」

ジークは確かにエッチなことが目的で『擬人化薬』を作ったし、『黒竜』にも拘束しやすくする以外の理由で使った。だが、あくまで女性の綺麗な裸体を視姦したり胸を触ったりしたいだけで、理性なき獣とまぐわおうと思ったことはない。

「それに『黒竜』は男に近い無性だった。『性転換薬』も性別を変えるだけの薬。性別がないなら使えない」

「いや、『賢者の石』とか作成できたんやから、性別を与えるくらいできるやろ……」

「今まで性別を与えようなんて考えたことがないからな。持ってなかった」

錬金術で女を創造したことはあるのだが。右腕と左脚を持っていかれかけるわ、全肯定ぶりつ子な性格になるわで二度とやらないと決め、最初で最後の人造人間にパンドラと名付けて三千年も拗らせた男に娶らせた。褐色でクーデレの巫女に化けた女神にとんでもない目で見られた。

「話を戻すぞ。『擬人化薬』を『黒竜』に使ったらな、人を吐いた……いや、人だと語弊があるな。人型の『精霊』だ」

『精霊』やと!？」

「ああ。人に変化していく途中でな、丸呑みや嘔吐が好きなの気が知れないと思ってしまう光景だったぞ。まあ、残っていた目を『擬人化薬』を注入する時に失って、更にゲロって疲弊した挙句、人の身体に慣れない『黒竜』をマウントポジションで顔面を中心に殴り続けた後、締め技で落としたんだがな」

「そっ……その、精霊は……どうなったの?」

口数の少ないアイズが会話に割り込んだことに彼女の事情を知る三名を除いた全員が驚愕した。ジークも床に転がっている自分の顔とくつつきそうなくらい身を屈めたアイズに驚きながらも話を続ける。

「生きてたよ。大分弱ってたから臭いと汚物を軽く落として、応急処置をしてから急いで世話になった女神のいる村まで運んだ。今も看病してる……でもさ——」

「!」

「ふーん、その女神の名前は? 信用できるんやろうな?」

「名前はアストレア様だ」

「よっしゃ、信頼度ナンバーワンのアストレア! よかったなー、アイズたん!」

「うん……うんっ!」

ぽろぽろと涙を零すアイズを慈愛に満ちた笑顔のロキが撫でまわす。そんな神と少女を何も言わず暖かな笑みで見守る小人族^{バルウム}、ドワーフ、ハイエルフの三人に仲間であるアマゾネスの双子や狼^{ウエアウルフ}人は困惑しながらも、目の前の光景はきつと尊いものなのだと理解し、小さな笑みを浮かべた。

「——まさかアストレア様と助けた精霊に犯されるなんて想像できなかった!」

「うわーっ、アイズがひっくり返ったー!？」

「石化してる!? ていうか息してない!? ぽっ、回復薬を!」ポーション

「んなもん使えば喉に詰まるだろトドメ刺す気かアホゾネス!

【「ディアンケヒト・ファミリア」まで運ぶぞ!」

「おいゴラアツどういことじゃあ!!」

「アストレア様に『黒竜』捕獲を祝ってパーティを開いてもらったら薬盛られた。『容姿や性格が私の知っている神とそっくり。独り善がりなふりをして、自分のためだって言い張って、全部自分で背負おうとしているところが特に。だから……今度は逃がさない』って訳のわからないことを言いながら、もし『黒竜』に理性があった時のために用意していた『妊娠剤』を服用して……禁欲して限界だったから断れなかったし……何故かまぐわっている時に精霊も魂がどうこう眩きながら混ざって来て……俺はどうしたらいいんだ!!」

「結局『黒竜』を孕ませようとしていたこと自体は間違っていないんかい

!! 判決、死刑!! フィン、ガレス、殺れ!!」

「くっそお、英雄は零落する運命なのか!？」

「自分の場合は果てしなく自業自得やドアホ!!!」



「——ということがあったのさ」

「……どうして生きてるんですか?」

「『ステイタス』の封印を破った。ヘルメス様を送還されて『恩恵』が封じられたとかじゃないからな」

「『古代』の子供達みたいな真似できたの、神時代の今じゃ君だけだと思おうよ……」

「ふっ、善悪問わず人を救うただの英雄ならあそこで朽ちていただろうが、可愛い女の子なら人も怪物も関係なく助ける変態紳士である俺が死ぬ訳ないだろう!」

ダンジョン探索の折、喋るモンスターの『ヴィーヴル』を保護して帰還を余儀なくされた「ヘステイア・ファミリア」の本拠、『竈火の館』で『ヴィーヴル』に『ウィーネ』と名前を付けて彼等の空気が緩んだところを狙って侵入したジークは、フェルズの指示で『異端児』について教えるついでにバベルであった出来事を話していた。

唐突な侵入者に「もうおしまいだー」とか叫びまくって大混乱に陥っていたヘステイア一行。ジークが味方だと知って一番に落ち着いたベルは『異端児』に關係ない疑問を尋ね、その回答にヘステイアは呆れ果てた。

「まっ、その新しい『異端児』をどうするかは相談して決めろ。地上と一緒に生活するなら『擬人化薬』か『人化薬』を渡すし、モンスターのままにいるならそれもよし。誰かに見られても【灰男】の実験体と言えれば納得されるだろう」

「この上ない実績がありますしね……」

「説得力抜群だな……」

「それと、どうしても困ったら【ヘルメス・ファミリア】か【ロキ・ファミリア】を頼れ」

「はあっ、ロキイ!? どっ、どうやって協力体制を築いたんだい? ロキの眷属はモンスターが喋ろうが理性があろうが殲滅以外選ばないだろ、ボク達じゃあるまいしー!」

「世界を俺しか男がいけない楽園にしてやろうか? って言ったら快く頷いてくれた」

「……暴力よりもエグい!」

「イシユタル様より悪辣な気がします……」

「そんじゃ、伝えるべきことは伝えたいし帰る。……あ、そうだ」

「……?」

「俺は才能がある。でも、才能だけじゃここまで来ることにはなかった……好きは才能を超える。お前等も頑張れ」



次の日。ジークはオラリオからいなくなっていた。

理由は非常にしようもない。『恩恵』を封じられたせいで『制約魔法』も一時的に失われてしまい、今まで課してきた『制約』^{ギアス}が解除されてしまったのである。フェルズが何が何でも助けようという素振りを見せなかったのもこれが原因だ。

『異端児』^{ゼノス}のことを隠されていたジークは何の事後処理もなく逃亡。結果、眷属^この責任は主神^{おや}が取らなければならなくなり、ヘルメスは忙殺されることになる。

置き土産のジーク特製栄養ドリンクが手放せなくなつたヘルメスは、書類の山に埋もれながら絶叫する。

「本当に俺をアスファイやタケミカツチみたいな苦勞人にしやがってえ……いい加減才能の無駄遣いをやめろよあの天才^{アホ}——!!!」

番外編 アストレア・レコード

『黒竜』を倒すためにオラリオの連中の超克の礎になるう〜？ 『黒竜』の討伐に失敗しただけで、散々守られておきながら役に立たなくなつたとわかるなり切り捨てた奴等のお膳立てなんて御免だね。それに『どうせ死ぬなら』とか言ってるけど、二人の毒と病を治す薬ならできてるし、そもそも『黒竜』は俺が倒してる。はい、アンタの話は終わり。アルフィア、その水晶玉……『眼晶』オクルスを起動させて。メーテリアがお前と話したがってたぞ」

「ちよつと言ってることがわからない」

原初の幽冥を司る地下世界の神、エレボス。下界と人類を愛する彼はもう幾ばくの猶予もない『約束の刻』ときや『黒き終末』に対抗する力を与えるため、最強の派閥ゼウスとヘラの生き残りであるザルドとアルフィアを探し出し、『絶対悪』となつてオラリオの冒険者達の危機感を煽る計画を持ち掛けた。

割とすぐに領いた二人だったが、毒と病に蝕まれる自分達の世話をしてくれたとある人物には筋を通すために何をするつもりなのか教えておきたいと条件を出した。エレボスは計画がダメになる可能性を考えるも、そのくらいならいいだろうと了承した。

そしてエレボスが見たのは、人里離れた所に建てられた大きな一軒家で全裸のアルフィアがプリントされた抱き枕を作っている自分そっくりの青年だった。

キレたアルフィアに『魔法』を放たれても躲した青年や壊れなかつた家に驚いたエレボスだが、荒ぶる彼女を宥めて計画の全容を語って聞かせて返ってきたセリフにはもつと驚いた。全知の神なのにこの子供が何を言ってるのかさっぱりわからない。頭がどうにかなりそうだった。催眠術とか未知の言語とかそんなチャチなもん断じてねえ、もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ。

前提である『黒竜討伐』がなくなり、計画が根元から崩れそうな予感を察しながら、エレボスは青年——ジークに色々と尋ねていった結果、以下のことがわかった。

・ジークは「ゼウス・ファミリア」の所属であり、『黒竜』討伐の時はL.V. 5で年齢が10だったせいで三大冒険者依頼には参加できなかった。

・ゼウスとヘラの眷属達が敗れた時に備えて、髪の毛一本からでも身体全体を再生できる複製技術クローンや天界から魂を呼び戻す『反魂の杖』を開発し、『賢者の石』の不老不死に並ぶ人類の夢である死者蘇生を行えるようにしていた。ついでに『賢者の石』も作った。

・知性と理性を宿すモンスターである『異端児』との制約で『擬人化薬』や『人化薬』の作成をしていた。

・こういつた開発が偉業と認められたおかげで三年前にL.V. 8に到達し、『魔法』や魔道具マジックアイテムを使えば勝算は十分あると判断。『黒竜』の所に向かい、討伐どころか捕獲に成功した。決め手は薬による擬人化からの千年殺ものすごいかんちようし。

・『黒竜の生き血』を使って副作用が出ないように、これ以上ないほど完璧な準備をして死者蘇生を行った。サボりたがりの神々が多く地上に君臨してくれていたことで、比較的最近に死んだ仲間達の魂は漂白されておらず、死者蘇生は成功した。しかし、ゼウスとヘラに『もし自分達が天界にいたら雷を落として殺していた。だから二度と使うな』と言われ、もう死者蘇生はできなくなった。でもL.V. 9になった。

・ゼウスとヘラの眷属達はアルフィアの妹の子供が住む山奥の村で一緒に暮らしており、もうオラリオと比べ物にならない戦力が集まった魔境になってしまった。『黒竜』を捕獲した際に保護した『精霊』もこの村に住んでいる。

・恩の押し売りで性癖丸出しの『メイド喫茶』を開かせたら何故か『執事喫茶』もできた。ヘラの眷属はメイドというより冥途の化身みたいだった。見た目はいいけど、いい歳した連中がしていると考えると笑えると誰かが言ってしまう、「ゼウス・ファミリア」は壊滅した。壊滅ではなく奴隷市場に売り払われたとの話もあるが、真偽は不明。ジークの父親は養豚場の豚になった。アルフィアの甥っ子はガタガタと震えていた。

・ザルドとアルファイアの薬を完成させて届けるついでに最愛の妹を蘇生させた恩を盾に脱いでもらおうと考えながら抱き枕を作っていたらエレボス達が来た。

「——話すことはそれくらいだ。他に聞きたいことは？」

「ザルド、やべーよ。俺すげーカッコ悪いよ。どうせ死ぬならとか言ったのに死ぬどころか蘇生の手段が確立されていて、『黒竜』はとつくに倒されて、更にはオラリオの戦力が一段階上がっても蹴散らせる連中がゴロゴロいる……まるで道化だ。『俺達は絶対悪』ってキメ顔で宣言したのに黒歴史確定じゃん」

「やべーは俺のセリフなんだが？ 見ろ……薬で毒が消えたのに嫌な汗が止まらない」

部屋の隅に固まってひそひそと会話するザルドとエレボス。その反対側ではアルファイアが水晶玉に映るほわほわとした雰囲気纏う白い女性と楽しそうに話していた。普段の彼女からは想像できない優しい気な声音だった。ジークはお茶を飲みながら今なら胸を揉みしだいても怒られないんじゃないだろうか？ とアルファイアをじつと見ていた。

神故に永遠に残る黒歴史に震えていたエレボスだったが、何度か咳ばらいをして真剣な表情になる。

「正直、お前のような存在は想定外も想定外なんだが……オラリオの英雄の雛をそのまま燻らせているのはもつたいない。計画は実行する。止めるか？ それともお前も参加するか？」

「参加するよ。覚悟を決めた二人は『黒竜』がいようがいまいがやるだろうし。ザルドはともかくアルファイアは死なせたたくない」

「俺はともかくって何だ、おい」

「それにオラリオの連中には腹が立っていた……くつくつく、可愛い女の子達は無理矢理犯してやるぜえ……なんせ俺は『悪』になるんだからな……爺セウスから『いやいやよも好きの内』って真理を教えてもらったからなあ……！」

「純愛大好きのおモンスターらせた童貞だろう、お前……」

「さつきからやかましいぞザルド！ 人生と呼べない下等生物みたい

な生を謳歌させてやろうか!？」

「ははっ……オラリオの連中が可哀想になつてくるな」

オラリオで『死の七日間』と呼ばれる大抗争が起きる少し前、最強の共犯者をエレボスは仲間にした。

「ところで知り合いのおっさんがガワは儂い美少女になつて快樂で頭が滅茶苦茶になるまで犯してくれて言つてきてき。勃起したけど中身がアレだから断つたんだ。どうするのが正解だつたと思う?」

「よし、とりあえず俺とそっくりな顔で卑猥なセリフを言うのやめろ」



準備をするから外で待つて、と言われて家主のジーク以外の三人は外に出た。すると突然、アルファイアが口を開き、

「^{ルギオ}炸響」

『ああーっ!? 夜なべして作ったアルファイアに淫夢を見せる抱き枕が粉々にー!』

家の中から爆音とジークの絶叫が聞こえた。

「アルファイア……返しきれない恩があるのにお前……」

「それとこれとは話が別だ」

「そーいやさつき『^{オクルス}眼晶』とかいう水晶玉を割っていたが、何を言われたんだ?」

「甥に叔母さんと呼ばれた」

「ええー……絶対希少だろ、あの^{マジックアイテム}魔道具……」